@-アットマーク-

ナスティー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

@ - アットマーク -

【Nコード】

N5934H

【作者名】

ナスティ

【あらすじ】

「じよ、冗談じゃないって・・・」アパートに戻るやいなや、ドアに貼り付けてある紙を見てそう呟いた。張り紙には「家賃滞納につき、退去してください」的なことがバカ丁寧に書かれていた。つまりあれか、出て行け、と? 「ああ、いたいた」「あ、先輩」隣の部屋から大学の先輩が顔を出してきた。

姫たちの恋路

「じよ、冗談じゃないって・・・」

アパートに戻るやいなや、ドアに貼り付けてある紙を見てそう呟いた。

張り紙には

「家賃滞納につき、退去してください」的なことがバカ丁寧に書かれていた。つまりあれか、出て行け、と？

「ああ、いたいた」

「あ、先輩」

隣の部屋から大学の先輩が顔を出してきた。

「大家さんから伝言だぞー。家賃払うまで帰ってくんだとよ。執行猶予は二ヶ月だとよ」

「んなつ!？」

「それ以上は部屋も他のやつに明け渡すつてよ」

「ちよっ・・・それは横暴ですよ!」

「俺に言つなー。だいたい浅倉の気前がよすぎるのがいけないんだぞ」

う。

たしかに、金をなくしたことはおれ自身の責任だ。

ここではあえて詳細は明かさないが、今の俺の家計は火の車が五台ほど。仕送りの生活費ではなんとかか食費や電気代をまかなえるものの、家賃までは無理だった。そのために滞納せざるをえなくなってしまうのだが、ついに恐れていた事態が・・・。

「そう気を落とすな。二ヶ月死ぬ気でバイトをすればなんとかなるかもしれないぞ?」

「・・・んな無茶な」

「あと部屋の荷物は外に出したらしいぜ。ゴミと間違われる前に回収しとけ」

「それをはやく言つてくださいよお！」

ダッシュで表に出ると確かに見覚えのある家具たちが陳列していた。ああ、マイテレビの画面に罅が……!?

すつと持ち上げようとして気付く。

これ、どこに置けばいいんだ？

「……せ、先輩ー!!!」

ばたばたと駆けていってドアをドンドンと叩く。

「なんだよ浅倉……っておい！なに土下座してる!?!」

「お願いします。部屋においてくれとはいいません。でもせめて家具たちだけは……!」

「……わかつたよ。二ヶ月だけだぞ」

先輩が哀れむように俺を見ている。

「ありがとうございます！」

こうして家具たちの保管場所は確保したのだが……

「さて……二ヶ月どこに住もう」

あとは自分の身だけだな、はははは……。

こうして、この俺、浅倉空の日常は崩れ去った。

神様も意地悪な風を吹かしてくれるもんだよね……。

部屋を追い出されて、一日が経った。

この俺、浅倉空はなんのあてもなく街中をうろついていた。とにかくバイトを探さねば……。このまま野宿生活なんてイヤすぎる。

大学は今春休みだ。といつても、もうすぐ休みも終わるけど。そのまえになんとしてもいいバイトを探さなければ死活問題だ。

空

「あー、なんていうか不幸だ。いや、不幸以外なんでもないか」

自虐的に笑ってみる。はは、けっこう空しいね。

耕介

「……ん、おまえ……？」

空

「へ？」

呼ばれて振り向くと、そこには茶髪の同年代くらいの男がいた。つか誰だ？

空

「……どちらさま？キャッチならとつと失せろ、と仮定した上で言ってみるが？」

耕介

「その言い草はやっぱり空か！俺だ、耕介だよ」

空

「……耕介？」

こうすけ……こうすけ……耕介？

空

「耕介！？ほんとにお前なのか！？」

耕介

「ほかにだれがいるんだよ」

1年前、同じ高校のクラスメートだった藤咲耕介だった。卒業と同時に関わなくなってしまうが、しばらくぶりでもその様子は変わっていない。見た感じはえらく変わっているけど。

だがさすが甲府の双壁と呼ばれた一人。そのオーラは禍禍し……いや、神々しいと錯覚するほどに濃い。ちなみに双壁のもう一人は

もちろん俺だったりする。

空

「久しぶりだなあ！どうしたんだよ？世界を巡ってるんじゃないかっ
たのか？」

耕介

「ん、ああ。まあそれも含めて話がある」

空

「ちょうどいい。俺も愚痴を聞いて欲しかったところだ」

そうして二人で、近くの公園へと行った。途中缶ジュースを買って
ベンチに腰を下ろした。

空

「離婚だあ！？」

耕介

「まあな」

耕介の話というのは思っていたよりもずっと重かった。進学しな
かった理由も、両親の離婚騒動が問題だったかららしい。

耕介

「まあまあから険悪だったんだ。もうじき離婚するだろうね。今母
さんが慰謝料請求してるらしいから」

空

「じゃあこれからどうするんだよ？」

耕介

「さてな。俺はもう親に頼らなくても生活できるけど・・・問題は妹のほうでな」

空

「妹・・・ああ、あのちびっこか」

頭の中から耕介の妹の顔を引き出す。あやふやだが、活発な感じの女の子が浮かんだ。例えるなら猫のような。

空

「でもたしか今は・・・ええと十一歳か？」

耕介

「そ。その歳だと、どうしても親が必要なんだけどな」

空

「けどな、ってなんだよ？」

耕介

「離婚騒動でそれどころじゃなくてな」

空

「・・・そっか」

耕介

「それで今は事情があって妹と二人で暮らしてるんだ」

空

「生活費も全部おまえが？」

耕介

「まあなー。まあいまやってるバイトがいいところだから、それもいいかと思ってるな」

空

「・・・お前って苦労人だな」

耕介

「自覚してるよ。そういやお前はどんなんだ？なんか愚痴がどうと

か

空

「あ……」

耕介の話を聞いた後ではずいぶんと惨めな愚痴だと感じてしまう。だが話さないというのもあれなので全部話してしまった。途中から笑い声がこだましたしたのは想像に難くないだろう。

耕介

「ははは！そういう抜けてるところはかわってないんだな」

空

「うるせえ！」

耕介

「しっかしまあとんだ災難だったな」

空

「耕介とは違う意味で苦しいんだよ」

耕介

「まあ俺もさすがに外国旅行しっぱなしだったから日本は慣れなくてねえ」

空

「てめえ妹ほつたらかしてなにやってんだ！？つか卒業式でかくよく去ってそのあとは娯楽に走ったのかよ！？」

耕介

「ふん。この俺にこんな島国だけで一生を過ごせと？」

空

「いや、お前みたいな天災は県外に出るな。ついでに市から出るな。さらに言えば町からも出るな。いや、いっそのことひっきーになつてくれ」

耕介

「天災はお前だろ！高校時代はさんざん俺に罪をなすりつけやがっ

て

空

「さんざん？五回に四回の割合だったはずだぞ？」

耕介

「多いつての！」

空

「知らないな。学園祭でステージから観客席にダイブするようなやつ
の戯言など」

耕介

「ほつとけ！それよりお前、今は家も金もなく困り果てているんだ
つたな？」

空

「ああそうさ！笑わば笑え！地球の重力に縛られたアースノイドが
！！」

耕介

「生憎コロニー建造はまだ先だ。ない物は落とせまい」

空

「ふん……」

耕介

「そこでお前においしい話があるんだが……」

と、耕介が持ちかけてくれた話はまさに起死回生の一打と繋がった。

空

「いらしゃいませー！」

腹から声を出して挨拶をする。

空

「二名様ですね。ではこちらへどうぞ」

そう、耕介から持ち出された話というのはバイトだ。なんでもあまりにもきついたのでバイトが逃げ出して困っているらしいとのこと。たまたま会った俺に白羽の矢が向いたわけだ。

空

「ジヨッキはいりまーす！」

能力給で、うまくいけば時給もかなりよくなる。

だがそのぶんたしかにきつい仕事だった。従業員は俺と耕介のウエイター二人に、店長兼コックの鹿島さんだけ。店は広くもないが狭くもない。はっきり言ってこの人数はきつい。

耕介

「空、レジ頼む！」

空

「了解！」

初日からこの重労働だ。

つい三時間前に持ちかけられた話だったが、ほかにあてのなかった俺にとって拒否権すらなかったわけだが。

空

「耕介、三番オーダーだ！」

耕介

「わかった！」

まあこの手の仕事は以前にもしたことがあるので慣れている。なんとか上手い具合にサイクルさせていき、夜の十一時でようやく終了になった。

空

「たはー・・・」

耕介

「おつかれ」

空

「おう」

控え室のパイプ椅子を三つばかり並べてそこに横になった。ああ、節々が痛い。こんなにきついホールも久しぶりだぜ・・・。

????

「おつかれ、浅倉君」

空

「あ、店長。おつかれさまです」

恰幅のいい店長の鹿島さんが労いの言葉をかけてくれる。

鹿島

「でもさすが耕介の友達だな、いい仕事してくれる」

耕介

「はい、正直ここまでできるやつとは、俺も驚いてますよ」

空

「ひでー。共に甲府の双壁と呼ばれた仲じゃないか。能力がお前に劣っているわけないだろ」

まあこれでフルスロットルだけど。だいたい俺はホールでなくキッチン向きなんだ。ホールは耕介一人で・・・とも思ってたがさすがにこれを一人でやるのは無理だろうな。それでも耕介ならなんとなくそれでもいいかと思うけど。

耕介

「それは消したい過去のひとつなんだがなあ」

と、耕介が言ったが無視。

鹿島

「はいこれ、今日の給料」

空

「え？もうですか？」

鹿島

「うちは日給制なんだ」

空

「ありがとうございます！」

金がなかった俺にとってそれはまさに神の恵みだった。

鹿島

「今日は初日ということもあって、少しサービスしておいたよ」

封筒を開けると五千円札が一枚に千円札が四枚あった。・・・お
お。

耕介

「あー？店長、俺より千円多いじゃないですか」

鹿島

「耕介も初日は多くしてやっただろ」
空

「うう、これでなんとかなる・・・」

札を握り締めながらしばらく天を仰いでいた。ずいぶん間抜けだったと思う。

耕介

「おつかれです」

空

「おつかれさまでした」

夜の十一時を半時ほどすぎたから耕介と店を出た。おわあ、足腰にきてるよ・・・。まじで重労働だったな、これは。

耕介

「助かったぜ、空。これからも頼むぜ」

空

「ああ、任せろ」

耕介

「さて、それじゃあ帰るか」

空

「でもほんとにいいのか？」

耕介

「なーに、バイトにきてくれるんならお安い御用さ。つか部屋があまりまくっててしょうがないんだ」

空

「助かるよ」

耕介の話はバイトだけではなかった。なんと二ヶ月の間、バイトを

してくれるんなら家の部屋を提供してくれるという。

空

「そんなに大きなうちなのか？」

耕介

「ああ。今は二人しかいねえからな」

空

「ふうん」

耕介

「まあちよつと癖のあるやつがいるけど仲良くしてやってくれよ」

空

「だいじょーぶだいじょーぶ。昔も仲良くやってたじゃん」

耕介

「まあ・・・な」

空

「ああ？」

耕介

「ま・・・そうだな」

町の外れ付近にあるおおきな洋館へとたどり着いた。たしかに二人で住むには大きすぎるな。つーかお化け屋敷みてえだ。

耕介

「ただいまー」

空

「おじゃましまーす」

玄関には灯りがついていた。広いエントランスに入ると、さらにその広さが強調される。つーかここを二人で？広すぎだろ。

耕介

「ひなたー、いるかー？」

「????」なにー？」

遠くから声がきこえて、パタパタとした足音が響いてきた。

ひなた

「ふあゝ・・・お帰りあにきー、っってお客さん？」

大きな欠伸をしながら、その階段の上から姿を現したのは寝巻き姿の小さい女の子だった。型までの髪を揺らしながら眠そうな目をこちらに向けてきた。

耕介

「よー、コイツ、今日からここに住むことになったから」

ひなた

「は・・・？」

その子は目をぱちくりとさせてこっちを睨んできた。明らかに不審そうに。

ひなた

「誰なのよ？その貧乏そうなやつ」

空

「なっ!？」

おいおいおい、確かに金はないがなんでこんなガキにいきなりそん

なこと言われなきゃなんねえんだー！……と叫びたかったが我慢。
俺は大人だ。

耕介

「ほら覚えてないか？浅倉空だよ」

ひなた

「む……？」

どうやらなにかを思い出そうとしているらしい。腕組をしてしばらく黙っていると、やがて小さい声で……

ひなた

「そら……にいちちゃん？」

空

「あー、よかった。覚えていてくれたか」

これで知らないとかいわれたら正直ショックだぞ。昔はあんなに一緒に遊んでやっていたんだし。

空

「久しぶり」

ひなた

「な、なんでそらが？」

……もう呼び捨てかよ？

でもなんか困惑しているようだな。まあそりゃあそうだ。最後に会ったのは三年前だ。いきなり再会すれば驚いて当然だろうな。ふむ、でもなかなか可愛く育ったじゃないか。ちょっと目付きがきつい気もするけどチビ……いや背が低いせいかマスコットキャラみたい
なやつだ。

耕介

「こいつなー、金なくて大家から追い出されて家がないそうなんだ。それで二ヶ月ほどうちで預かることになった」

ひなた

「・・・バカじゃないの？」

空

「ぐ・・・」

反論できない自分が情けない。まさかこんなガキ・・・いや、お子様にまでそんなことを言われるとは・・・。

耕介

「まあお陰でバイトに入ってくれることになったし、そのくらいいいいだろ？空の収入の三割がうちに流れるように手を回したからさあ」
ひなた

「全部貰えばいいのに」

げふっ！？な、なんですとー！？ていうか耕介妹！おまえもなにあってさりとひどいことを言ってるやがる！？

空

「聞いてないぞ耕介！！？」

耕介

「冗談だ」

空

「はぁ・・・」

耕介

「つーわけでこのポケキャラうちに置くからなー」
ひなた

「ええー！？どうしてそらなんかと！あたしイヤだよ！？」

空

「悪かったな、俺だってこんなガキと同居なんてしたくねえよ」

ひなた

「なっ・・・！？子供じゃないわよ！もう11歳なんだから！」

空

「ガキじゃねえか！そういう台詞はあと9年したら言え！」

ひなた

「なによ！いつまでも子供扱いしてるんじゃないわよ！」

空

「うるせえチビ！」

ひなた

「なんですって！？」

空

「なんだよ！？」

耕介

「はいはい、仲がいいのはいいけどそのくらいにしような？」

空

「どこがだ！」

ひなた

「どこがよ！」

見事にハモって言ってしまっ。

耕介

「ほら、空も大人げないぞ。あとひなた。お前もちょっと言いすぎ。二ヶ月なんだからお互い我慢しろ」

ひなた

「むう・・・」

空

「わかったよ・・・」

ひなた

「ふんっだ！我慢してあげるわよ」

か、可愛くねー！こんな性格だったか？俺の中じゃ

「そらにいちやーん」とか言ってくる可愛いイメージだったのに。

再会して二分でそれを完全にぶち壊された気分だ。なんていうかさすが耕介の妹・・・。

耕介

「あとこいつ居候だから、好きに使っていいからなー」

ひなた

「わかった、じゃあ明日の朝ごはん、あたしの代わりに作ってよ。

おやすみ」

「んなつ!?!」

抗議するまもなく耕介妹はスタスタと部屋へと戻っていった。

空

「・・・」

耕介

「はは。まああんなやつだけど仲良くしてやってくれよ」

空

「まあ・・・文句はいわん」

はあつとため息をついて額に手を当てた。文句は言わん。が、愚痴は言いたい。

耕介

「じゃあとりあえず部屋はあそこの端の部屋が使えるから。とりあ

え、今日も休め」

空

「ああ、だけどその前に……」

耕介

「ん？」

空

「台所と使っていていい食材だけ教えてくれ。明日の朝用意しなきゃならん」

こうして俺、浅倉空と藤咲ひなたの再会はある程度あっけなく終わった。もちろん、運命なんてものも感じるはずもなかった。

トントントン……軽快な包丁の音が響き渡る。なべもぐつぐつと煮えていいにおいが立ち込めている。

そんな匂いにつられてか、ひとりの子供が台所に姿を現した。

ひなた

「……な、なにやってんの？」

ひなただった。昨日見た寝巻き姿のまま、わずかに眠そうな目をこちらに向けている。

空

「あー、おはよう。なにって言われたとおり朝食の用意」

テーブルの上には見事なハンバーグとサラダ。そしてほくほくとした白い御飯が用意されていた。

ひなた

「これ・・・全部そらが作ったの？」

空

「うん」

ひなた

「ほんとに？」

空

「うん」

ひなた

「・・・」

空

「どしたの？」

ひなた

「な、なんでもないわよ」

何故かプンスカと怒るひなたは黙って席についた。そしてまじまじと料理を見つめている。さあ慄け！

ひなた

「お肉使ったの？ちょっと！それじゃあ夕飯が・・・」

空

「あー、大丈夫。それ、ハンバーグならぬ豆腐バーグだから」

ひなた

「と、豆腐？」

空

「そ。かさまししてるからけっこうポリウムあると思うぞ。あと使っている食材は耕介から聞いておいたから無駄はないぜ」

ひなたが目を丸くしている。くくく、こっという表情を見ると愉快だ。みたかひなた。俺は料理にはちよっとうるさいぜ？

耕介

「おはよー、おお！すごいなこりゃ」

耕介も起きてきて、ひなたとは違った反応を見せてくれた。ひなたもこんなならもっと可愛いのかな、と思う。

耕介

「いただきまーす」

空

「いただきまーす！」

ひなた

「・・・いただきます」

そうして朝食を三人で食べ始める。

耕介

「うん、うまい！」

空

「当然、俺のつくったもんだぞ」

耕介

「これならバイトのときもいざとなったらキッチンもできるな」

空

「おいおい、アレ以上きついと死んじゃまうよ」

耕介は笑顔で食べてくれているが、そのよこのひなたは微妙な表情をしている。

空

「ひなたちゃん、どうだい？」

ひなた

「え？あ・・・うん、まあまあかな」

空

「はは、よかった」

なぜかむっとしているひなた。美味しいなら美味しいと言えよこのやろつ。

耕介

「ほらひなた、学校遅れるぞ」

ひなた

「わかってるわよ！」

がつかつと御飯を平らげ、

「ごちそうさま！」というとさっさと出て行ってしまった。

空

「しっかし、ひなたちゃんもちょっと性格変わったか？」

耕介

「ん、まあいろいろあったからな」

空

「だよな、まだ子供だもんな」

耕介

「可愛げなくて悪いな」

空

「いや、そうでもないぜ」

耕介

「ん？」

空

「全部食べてくれたよ、これ」

そういつてからになった皿を指差した。お粗末様、と。

ひなた

「ちよっと!」

後片付けを済まして部屋に戻ろうとすると、玄関付近でひなたに呼び止められた。ひなたは今時風の制服を着ている。今から学校なのだろう。それにしても小学校から制服とはどこのミッションスクールだ?

ひなた

「あたしが帰ってくるまでにちゃんと掃除と洗濯もしておいてよね」

空

「はは、わかってますよ。居候ですからね。そのへんは心配無用さ」

ひなた

「わかつてるならいいのよ」

相変わらず眉毛を吊り上げながら高圧的に話すひなただが、はっきり言って迫力はない。むしろ背伸びしているとはつきりわかる。こいつはいつもこういうのか?

空

「ひなたちゃんは学校がんばって」

ひなた

「む」

空

「ん？」

ひなた

「ちゃんづけはやめて。そういう子供っぽいのがいやなの！昨日も言
ったでしょ？」

空

「ふーん？じゃあ、ひなた。いつてらっしゃい」

ひなた

「~~~~~!~!」

空

「ああ？」

何故かうつむいているひなたは顔を赤くしながら、

ひなた

「馴れ馴れしいのよバカ！」

と言って表へと飛び出して行った。馴れ馴れしいって……ちや
ん付けするなって言ったのお前だろ？

空

「あ、車に気をつけるんだぞー！」

そう叫ぶと、すぐさま

「バカ!~!」と返ってきた。口癖か？そのうち校正してやるつかね
。。。

空

「こんにちはー」

鹿島

「おう空！はやくホール行ってくれ！」

空

「わかりましたー！」

店長からはもう空と親しく呼ばれるほど、このバイトに浸かっていた。それはそのはずで、何と言っても俺には家賃を払って自分の家を取り戻すという野望があるのだ。それに明日からまた大学が始まってしまう。それまでにできるかぎり稼いでおきたかった。今日も夕方から深夜までノンストップで働いた。

耕介はこれに下準備からやっているのだからすごいと思う。

ちなみに昼間は大学の弓道部のほうに行っていた。もうすぐ試合だけにこちらもさぼるわけにもいかないからだ。

耕介

「オーダーはいりまーす！」

空

「三名様ご来店でーす！」

今日も果てし無く忙しかった。筋肉痛はしばらく抜けそうにないね、こりゃ。

空

「ただいまー」

耕介と帰ってきた藤咲邸はしんと静まり返っていた。さすがにひなたはもう寝ているのだろう。

空

「先風呂行けよ、俺はちよい台所でおにぎりでも作ってくるわ」

耕介

「そっか、じゃあおさきに」

そうして耕介は風呂場へと行き、俺は台所へと向かっていった。

空

「くら・・・」

電灯のスイッチどこだっけ？

手探りで探していくがなかなかみつからない。二分ほどしてやっと灯りが灯った。

空

「ん？」

するとテーブルの上になにやら皿が置いてあった。その上にはずいぶんと無骨なおむすび。二皿あるということは二人ぶんということか。

みるとそれぞれ

「あにき」と

「そら」という紙が置いてある。はは、なかなか可愛いことしてくれるじゃん。本人が聞いていたら殴られているかもしれないが、その無骨な形からずいぶんがんばってくれたことがわかる。

ありがたくいただくでしょう。

耕介

「おう」

朝、テーブルには耕介とひなたがいた。

ひなた

「そらは？」

耕介

「今日から大学なんだってさ。昼過ぎには帰ってくるらしいけど」

ひなた

「そうなんだ・・・」

耕介

「寂しそうだな」

ひなた

「なっ!？」

ひなたの顔がかーっと赤くなる。

ひなた

「冗談じゃないわよ!! なんであのバカに!!」

耕介

「そのわりにはずいぶん絡んでるじゃん。昨日もおにぎりに細工したんだってな。つーか俺までその被害を受けたんだが・・・」

ひなた

「そんなの知らないもん」

耕介

「昔はあんなに懐いてたのにな、なんだ? 反抗期?」

ひなた

「そんなわけないじゃん! そらが馬鹿なだけだよ」

耕介

「ふーん・・・愛情の裏返しと思ったけど？」

ひなた

「なっ・・・!?!?・・・馬鹿あにき!もう知らないっ!」

パンを齧りながらそのまま部屋へと戻っていくひなた。

耕介

「やれやれ、空ならあいつも素直になるかと思ったんだけどねー」

そういつてひとりテレビのニュースを見ながらコーヒーをすすった。

午前の講義が終わり、ようやく帰り支度をする。大学はまあつまらなくはないが、おもしろくない。ま、そんなものかもしれないが。

唯

「浅倉くん!」

空

「ん・・・浅葱さんか」

声をかけてきたのは同じゼミの浅葱唯さんだ。うーん、今日も綺麗なお方だ。さすがは甲斐嶺大学の白いコスモス。

凜

「やあ、そらちゃん」

あ、もう一人いたみたい。甲斐嶺大学のブラックサレナが。

凜

「ちょっと今私を無視したでしょ？」

空

「あー、心の声を読むな」

凜

「肯定したわね！」

空

「なんだよ、一段とリンリンと騒ぎやがって。だからお前はリンリンなんて言われてるんだ、凜」

というわけでこのりんりんな人が悪友の五十鈴凜。通称りんりん。名は体を表すというようにりんりんと響く声と行動力が特徴の同級生、つーか腐れ縁。もう何年だろうか・・・？いや、数える必要はないな。年齢とほぼ同じだ。いつつ元気なやつだが、いったいどうすればここまで元気になれるのか知りたいもんだ。

凜

「せつかくそらちゃんに声をかけてやったってのにそれはひどいんじゃない？」

ちなみにそらちゃんと呼ぶのはこの女以外にはいない。このへんに付き合いの長さを感じる。

空

「こんにちは、浅葱さん」

凜

「無視するなー！」

空

「ああ、凜。こんにちは。あんまり叫ぶと肌に悪いぞ」

凜

「・・・ぐう」

ふっ、口で俺に勝とうなど百年飛んで五年早いわ！まあ腕では勝てないけど……(汗)

唯

「今日は弓道部には行かないの？」

空

「うーん……今日は凜のところまで練習しようかと思ったんだが、いいか？」

凜

「いいよー。じゃあ私の稽古にも付き合ってよ」

空

「ええ？いつも通り型だけやりやいいだろ？」

凜

「そんなの腕がなまっちゃうよ。付き合わないと練習させないからね！」

空

「職権乱用だろ！？あの神社はお前の私物か！？」

そつだ。こいつの家は神社で、立派な道場があるのだ。空手から弓道までできる万能な場所だ。

ついでに言えばこいつの副業が巫女さんだったりする。

凜

「あー、うるさいうるさい。さあどうする？凜ちゃんに屈服するか永久追放されるかどっちを選ぶ？」

空

「追放は困る……」

凜

「さすが あ、あと新しい弓届いてるわよ」

空

「まじっ？よっしゅあ！気合入れてやるぜー！」

唯

「あ、もうすぐ試合なんだっけ？」

空

「あ、うん。今度こそ表彰台はいただくぜ」

唯

「じゃあ今度見に行こうかな」

空

「浅葱さんも好きだね。見てるのってけっこう退屈だぜ？」

唯

「そんなことないよ。あの……弓持ってる浅倉くん、かっこいいし……」

空

「ほら凜、お前もたまにはこっぴつ台詞を言ってみる」

凜

「ふーん？言ってみよう？」

空

「……いや、やっぱいい。想像しただけで気味悪い」

凜

「もうっ！遠慮しないでいいのに、いくらでもそらちゃんを讃えてあげるよっ。そらちゃんかっこいいっ」

空

「へっ！浅葱さんに誉められたほうが百倍嬉しいぜ」

唯

「えっ……！？」

凜

「ああー！そんなこと言うんだ？唯、こんなヤツ誉めることないからね。っていつか誉められるとこないし」

唯

「そ、そんなことないよ！浅倉くんかっこいい……いい……し……」

「・

凜

「はいはい、ちょっとおなかいっぱいになってきたからここまでにしておこうじゃないの」

唯

「り、凜ちゃん!？」

空

「やれやれ・・・」

相変わらずのコンビだな、この二人。見ていて退屈しない。まあいじられキャラの浅葱さんは少しかわいそうな気もするけど。

空

「んじゃああとで行くからな」

凜

「おっけー」

唯

「二人ともがんばってね」

空

「さんきゅ。試合ではいいところ見せられるようにがんばるよ」

唯

「うん あ、私もう行かなきゃ・・・。じゃあね、凜ちゃん、浅倉くん」

凜

「唯ばいばいーいー」

空

「じゃねー」

そうして浅葱さんが急ぎ足で帰っていった。

空

「・・・また病院かな」

凜

「うん・・・あの子、私たちみたいに運動もできないから、笑っても辛そうなんだよ」

空

「ならせつかく応援してくれてんだ。そのぶん俺らが活躍しないと悪いな」

凜

「そうだね、よしっ！じゃあ私もがんばるぞ」

凜が大きく声を張り上げて気合を入れた。

カランカラン

空

「はやく家に帰れますように」

神社で祈ればどうこうなるとも思わないが気休めくらいにはなるだろう。一応10円も入れたし。10円分くらいのご利益はあるはずさ。まあこの五十鈴神社にそんなご利益があるかはけっこう疑問だが。

凜

「そっいえば追い出されたんだっけ？馬鹿だね」

空

「む」

凜

「なんなら神社で泊めてあげよっか？可愛がってあげるから」

空

「即答拒否だ」

振り向くと予想通り凜が立っていた。今は巫女装束を着ていて、手には箒をもっている。なんてベタな格好だ。

空

「うるさいな、こっちは必死なんだよ」

凜

「まあそらちゃんの必死なんてたかがしれてるけど」

空

「うっさいうっさい！さっさと掃除しろ」

凜

「もうとっくに終わったよ。凜ちゃんは仕事が早いからね」

空

「じゃあなにやってんだ？」

凜

「うん、さっきまで観光客と一緒に写真撮影」

空

「物好きはいるもんだ・・・」

凜

「なんか言った？」

空

「いえ、なにも」

つーかここに観光ってどれだけ暇なやつだ。五十鈴神社は確かに地

元じゃ有名だが観光名所になるほどでもない気がするけど。

凜

「まあ私目当て？」

空

「そうかもな、確かにコアなファンはいそうだけど」

ぶっちゃけ凜の巫女姿はコスプレしているようにしか思えん。似合
いすぎているからな。たいして化粧もしてないくせに。

凜

「今なんか心の中で馬鹿にしてなかった？」

空

「だーかーらー、心を読むなつての！」

凜

「むう！・・・まあいいわ。それより着替えてくるから道場で待つ
ててよ」

空

「え？俺は弓道場に・・・」

凜

「先に私のほうに付き合つてよ。しばらく組み手してなかったから
体がなまってるのよ」

そうだよ、こいつのおじいちゃんが武道の師範なんだよな。もう他
界しちゃったけど昔は俺も習っていたんだ。途中で弓がおもしろく
なってそっちにいったが、凜はずっと続けているんだよな。おかげ
でこいつの腕っ節には歯が立たないし。それをかっこいいというや
つも多いが、事あるごとに実験台になる俺の身にもなってくれ。

空

「凜と組み手か・・・久しぶりだな」

道着に着替えて凜を待っていた。まあどうせ俺の負けだろうけど。
あの女は化け物だからな。

凜

「お・ま・た・せ・・・待った・・・？」

空

「色っぽい声は出さなくていい！北極並みの寒気がする！」

凜

「ちえっ、つまない男ね！」

先ほどの巫女装束の赤い袴が黒い袴に変わったただけだが、それだけでずいぶんと感じが変わる。つーか上の道着は変えていないな、ズボラなやつめ。

凜

「では・・・」

空

「お願いします・・・」

さて、ここからは集中しなくては・・・。凜の顔つきも引き締まっ
ていて、おちやらけた感じがまったくない。油断したら骨の二、
三本はもっていかれそうだ。

凜

「・・・」

空

「・・・」

凜

「ふっ・・・！」

空

「くっ・・・！」

軽い呼吸と共に右足から回し蹴りを繰り出す凜。それをなんとか腕でガードするが、たった一発で腕がしびれた。威力上がってるな、なにがなまってるだよ。
ちなみに蹴りのたびに袴がまくれ上がって見える凜の太ももになど興味はないと言っておくれ。

凜

「ふーん、これを止められるようにはなったのね」

空

「どっかの巫女さんに鍛えられているからね。主に路上で」

するといきなり間合いを詰めてくる凜。させるか！

同時に下がって間合いを保とうとするが・・・凜の速さのほうが上がった。

空

「くっ！！！？」

凜

「てえい！！！」

今度はとび蹴り。おいおい、少しはまくれ上がる袴を気にしろよ。
とか思っているうちに右足が繰り出される。これは片手じゃ無理か・・・！

空

「ぐっ！！！」

両手を使ってそれもなんとか防ぐ……が。

空

「!?!」

凜はそのまま右足を腕に絡めてあるうことかそれを軸足として空中から左足での第二撃を……ってちよつと待て!!?!?

凜

「飛燕連脚!!」

この女……またどつかのゲームから習得しやがったな。ファンタジーをリアルに昇華させるなと何度言えば……。

ちなみにこのときの一撃でふつとばされましたよ、もちろん。

空

「いただきます」

今日はバイトの休みの日ということで、同居を始めてから初めて三人での夕飯となった。

食事担当はもちろんこの浅倉空。はっきり言って他の二人は料理はだめだめだ。包丁の扱いからしてなっていない。まあこの俺のファンネルのごとき包丁捌きに勝てるものなどあるまい。ニュータイプ万歳。

耕介

「ふーん、それでりんりにやられたのか」

空

「ああ。おかげで筋肉痛どころじゃねえんだよ。そういや凜におまえのことはなしたら会いたがってたぞ」

耕介

「そうだな、今度挨拶くらいには行くか」

耕介も凜も、高校時代の同級生だ。よくつるんでいたし、当然耕介も凜と仲がいい。

空

「どうだ、ひなた。今日のやつは一段と旨いだろっ？」

ひなた

「そうね、けっこういいんじゃない？」

空

「ぐ・・・あいかわらず可愛くねーな」

ひなた

「うるさいな。あたしに誉めて欲しかったらもっと腕をあげるからね」

そんな調子でひなたは変わらずに食事を進めていく。おいひなた、表情では美味いと言ってるぞ。一方の耕介は笑顔で食べている。

「かひなたは今まで俺の前じゃ笑ったことはない。よっぽど嫌われてんのかね。」

ひなた

「ん」

ひなたが御椀を向けてくる。中身は空。

空

「は？」

ひなた

「ん！」

空

「なに？」

ひなた

「おかわりって言うてんのおバカー！！」

空

「言うてねえだろー！？」

ひなた

「そのくらい気付きなさいよ！まったくバカなんだから！」

空

「あー、バカバカうるさい。たまには違うことも言うてみる」

ひなた

「ひょーろくだま！」

空

「お前いつの人間だ！？」

耕介

「ははは！嬉しいねえ、こんな賑やかになって！」

空

「笑ってんな耕介！」

ひなた

「はやくおかわりー！」

空

「あーもう、わかりやしたよ！」

なんだかんだいって居候には変わりないわけだしね……。辛い立場だな、これ。

耕介

「そついやもうすぐ試合なんだから？」

空

「ん？ああ。明後日」

耕介

「ちょうど休みだな。ひなたと応援に行くよ」

ひなた

「ちよっ……！？あにき！」

耕介

「いいだろ、こうしてうまいもの作ってくれてんだ。応援くらい当たり前だろ」

ひなた

「む……」

ひなたは腕組しながらちよろちよろと俺のことを見ている。相変わらず目付きは悪い。

ひなた

「……わかったわよ」

空

「ありがと、ひなた」

そつお礼を言うと、再びひなたがこちらを見てきた。みているといふよりも凝視している感じだ。そしてだんだんと頬を赤らめていくと、

ひなた

「うっ、うるさいうるさい！「ごちそうさま！」」

トテトテと形容したくなるような走り方で出て行くひなた。相変わ

らずよくわからん。

耕介

「はは、あんなひなたは久しぶりだ」

空

「そうなのか？」

耕介

「おまえ、気に入られてるんだよ」

空

「どうなのかねえ」

味噌汁をすすず、と飲んでみる。・・・味噌汁の味噌の配分間違っ
たかな？

耕介

「なんだったら嫁に貰ってくれ。そうすれば俺も安心だ」

空

「ぶっ！！！！？」

思い切り味噌汁を吹き出した。

空

「耕介ー！兄貴が妹を簡単に差し出したりするなー！！」

耕介

「いやまああいつにも苦労かけてるからな、信頼できるやつと一緒に
なってくれればいいと思ってるのはほんとだぞ」

空

「ひなたはまだ十一歳だろ。気がはえーんだよ」

耕介

「あれ、おまえ、幼女趣味だろ？」

空

「ぐふっ!!??」

耕介

「すまん、冗談だ。許せ親友」

空

「こおすけえええええ!!!!」

空

「ふいー・・・」

いつも通りバイトを終えて帰るともう耕介の部屋の電気も消えていた。時間はもう日付が変わりそうだ。

空

「あーつかれた。まあ給料貰ってるから文句も言えないか」

今日は一人で残って残業していた。

なんでも店長が俺の料理の腕を見たいと言ってきて、得意なものを作れといわれたので創作料理を一品つくってきたのだ。

思いのほか好評で、店で出すことも検討してくれるらしい。これでボーナス確定だ。ちなみ作ったものは『天下無双焼き』。どんなものかは企業秘密。それにしても、疲れた。

空

「・・・あん？」

台所が明るい。なんだ？

そっと覗くと、なんとそこには小さな子供が危ない手つきで包丁を握っていた。

空

「・・・」

どうやらりんごの皮剥きをしているようだが、いかんせん、まだまだ粗い。つーか手を切りそうで怖い。いや、切るな、あれは。

空

「やれやれ」

仕方ない。手ほどきしてやるか。

空

「やあひなた。夜分遅くまで精が出るね？」

ひなた

「えっ！！？」

ひなたは驚いて振り返った。そして俺を見るとすぐに不機嫌面になる。そんなあからさまな顔しなくてもいいのに（汗）

ひなた

「なんだ、そらか……。何の用よ？」

空

「いや用ってほどでは……。ふーん、林檎剥いてたのか。でも危なっかしいな」

ひなた

「う、うるさいなあ！」

空

「いやいや。その小指の絆創膏、そうなんだろ？」

そういうとむっとして黙り込んでしまった。凶星か。

空

「ちょっと左手がお粗末かな。ちょっと貸してみ？」

ひなた

「あっ・・・」

ひなたの手から林檎と包丁を取るとすぐさま手本を見せてやる。

空

「ほら、こうしてもっと全体を安定させるんだよ。そうすればあんま力入れなくてももうまく切れるから。やってみるか？」

ふたたびひなたの手に戻った林檎は、今度は幾分か安定感を持って皮を剥かれていった。ふむ、学習能力はあるみたいね。

空

「うまいな。そんな感じだよ」

ひなた

「う、うん」

空

「ほら、油断すんな」

ひなた

「あっ・・・！」

すっと滑った包丁はひなたの手を軽くかすめてしまう。手の甲に赤い筋が出来る。はは、やっちゃまったか。

空

「あちゃあ」

ひなた

「う・・・」

空

「ちよっとまってる」

おそらくひなたが用意したであろう救急箱から（怪我前提で練習かよ・・・無駄に健気だね）脱脂綿を取り出し、かるく水につけた。

空

「手貸せ」

ひなた

「い、いいよ」

空

「なに言ってるんだ。ほら」

ひなたの手を掴んで強引に引っ張る。

ひなた

「ちよっ・・・！」

空

「少しはだまってる。・・・うん、かすり傷だな。一応消毒もしとくぞ」

そうやって傷の手当をすると、絆創膏を貼って救急箱をしまった。

空

「はいこれでおっけー。もう気をつけろよ」

ひなた

「あ……ありがとう」

なんだか恥ずかしそうに答えるひなただが、どうにも今日はおとなしい。いつもなら怒鳴ってくるはずなんだが？

空

「で、林檎むいてどうしたんだ？」

ひなた

「そ、それは……」

空

「あー、ちよつとまで。せっかくだから……」

さつと切りかけの林檎をすぐに食べやすいサイズに分解していった。皿に盛ってテーブルに置き、爪楊枝を指す。

空

「ほら、食べなよ」

ひなた

「……ん」

ウサギが餌を食べるように林檎にかじりつくひなた。なんだか小学生のときに飼育当番でウサギのゴン太に人参を食べさせていた光景が思い浮かんだ。ま、それを口にしたら怒らせるだろうけど。

空

「で、こんな夜中にどうしたんさ？」

ひなた

「べつに」

空

「林檎の皮剥き練習か？」

ひなた

「いいでしょ、なんでも」

空

「まあそのとおりだが怪我してるからあんま放ってもおけない」

ひなた

「む・・・」

空

「邪魔だったら謝るよ。とりあえずソレ食ったら寝ろ」

ひなた

「う・・・うん」

そうやって席を立つひなたが、去り際に言った。

ひなた

「明日が試合って、なんの試合なの？」

空

「ん、弓道。弓道」

ひなた

「おもしろいの？」

空

「さて。見たことないんならおもしろいかもな」

ひなた

「そらは強いのか？」

空

「一応エースだぜ？」

ひなた

「見えない」

空

「ほっとけ!」

なんだかよく喋るな、とひなたを見る。寝巻き姿に、まだ半濁きのセミロングの髪。いつものひなたなのだが、表情はいつもより柔らかい。

ひなた

「負けたらなんか奢ってよ」

空

「は……？」

ひなた

「そんなエースとかいうんなら勝って当然でしょ？」

空

「いや、あのね……」

ひなた

「せっかく応援に行くんだから負けたりしないでよ！」

その言葉を最後にばたばたと廊下を駆けていった。

空

「……あいつ応援してんのかしてないのかどっちだ？」

そして当日。九時から始まった試合は二回戦へと進んでいた。そしてなんと俺の大学は一回戦敗退。まじかよ……（苦笑）俺は八射七中でなんとか個人戦へと進んだが、これではひなたになんて言われるかわかったもんじゃない。

ひなた

「そらっ」

つて、その声は……

空

「ひ、ひなた……」

ひなた

「試合まだなの？」

空

「いや、それがな……」

ひなたが来る前に負けてしまったということ、とたんに不機嫌になっ
てしまった。

ひなた

「なによバカ！来た意味ないじゃない！」

空

「いや、俺は個人戦があるからまだ大丈夫！」

ひなた

「いつから？」

空

「そうだな。あと一時間くらいあるかな」

ひなた

「……じゃあ御飯食べに行こうよ。あにきが急にバイトになっ
ちやって」

空

「え？俺のトコにはそんな連絡は……」

ひなた

「そらは試合がんばれって言った」

空

「あー、あとで礼を言わなきゃな」

どうやら耕介は二人ぶんの仕事をしてくれているらしい。終わった
らすぐに行こう。

空

「じゃあ昼食へにいくか」

ひなた

「うん」

空

「なにがいい？」

ひなた

「なんでも。そらが決めていいよ」

空

「ん、じゃあ時間がかからないもんでいいか。……ってまさかお
まえ」

ひなた

「うん、お金持ってきてないから」

空

「……狙ったな？」

ひなた

「さあねー」

ニヤリ、と笑うひなた。耕介め……どんな風に育てやがった？

空

「もう諦めたよ……この悪女め」

そうやって安いと早いがウリの牛井屋へと入っていった。
ひなたはつゆだくの生卵つきという慣れていそうなものを注文して
いた。つーかよくそんなに食えるもんだ。この小さな体のどこに吸
収されているのか知りたいね。そういえばこいつはいつもおかわり
を三回はしている気がする。痩せの大食いとはこのことか。

ひなた

「おかわり！」

空

「おまえ少しは遠慮しろよ！」

結局ひなたは3杯も食いやがった。

空

「さて、そいじゃ行ってくるか」

ひなた

「どこで見ればいいの？」

空

「あそこが応援席。おとなしくしてるよ。警備員につかまったらち
やんと事情はなせよ」

ひなた

「子供じゃないわよ」

空

「いや、子供だろ。11歳」

ひなた

「うるさい！」

空

「わかったわかった。終わったら待ってるよ」

頬を膨らませているひなたの頭をぽんぽんと叩く。それでも表情は変わらなかったが、それでもはじめよりは慣れてくれたみたいだ。

唯

「あ、浅倉くん」

空

「え・・・あ、浅葱さん。来てくれたんだ」

白い服を着た浅葱さんがいた。白い服似合うな！。まさに白いコスモス。

唯

「うん。試合もう終わっちゃった？もっと早く来るつもりだったんだけどちょっと・・・」

空

「ん、大丈夫よ。これから個人戦だから」

唯

「よかった。袴姿かっこいい、ね・・・」

空

「ははは、ありがとう」

唯

「あ、こちらは妹さん？」

と、ひなたのほうを向く。それと同時に眩しいほどの爽やかな笑みを浮かべる浅葱さん。さすがだね。一般的な男ならこれで虜だね。

空

「あー、友達の妹の藤咲ひなた。ほらひなた、挨拶」
ひなた

「こんにちは、ひなたです。よろしくお願いします」

ぶっ……!?

あまりの変わり身の早さに思わず叫びそうになった。ひなた良い子モード発動!? ツーか猫をかぶるタイプだったのか、おまえ!?

唯

「こんにちは。浅葱唯です。よろしくね、ひなたちゃん」
ひなた

「はい!」

うわっ、こいつ完全にいい子ぶりやがって。おい裏ひなた、いつも態度はどうした? ……まあいい。今はおとなしくしていたほうが都合いいしな。……ちよつどいいじゃん。

空

「ちよつどよかった。浅葱さん、ひなたの面倒見てくれないか? 一緒に観戦して迷子にならないようにして欲しいんだけど」

唯

「あ、うん。もちろんいいよ」
ひなた

「……」

何故かひなたは顔をしかめている。おいおい、そんなに簡単に仮面

に罫を入れていいのかい？

空

「じゃあな。ひなた、いい子にいてるよ」

ひなた

「・・・うん」

唯

「がんばって、浅倉くん！」

ひなた

「がんばれ」

こうして試合会場へと向かっていった。

二人の応援を無駄には出来ない。がんばりますか。

唯

「ひなたちゃんは青稜なんだ」

ひなた

「はい」

唯

「あそこの制服可愛いよね。私もあそこの卒業生なんだ」

ひなた

「じゃあここの出身なんですか？」

唯

「うん。地元から動きたくなくてね」

ひなた

「そらって大学じゃどうなんですか？」

唯

「そら？あ、浅倉くんね。うん、なんかなんでもできちゃっ感じだな。すごく優秀なんだよ」

ひなた

「へえ……」

唯

「それに人気もあるしね。本人はあんまり自覚ないみたいだけど」

ひなた

「あさぎさんもそうなんですか？」

唯

「え？」

ひなた

「あさぎさんもそらのこと好きなの？」

唯

「や、やだなあ。違うって」

ひなた

「む……」

唯

「あ、ほら。始まるみたいだよ」

ひなた

「……」

唯

「やっぱり袴姿似合うね」

ひなた

「そうかな、たしかにいつもよりは……」

唯

「いつも？」

ひなた

「今一緒に住んでるから」

唯

「えっ……！？あ……そっか、そういえば友達の家で世話になってるって」

ひなた

「うん」

唯

「羨ましいな・・・」

ひなた

「え？」

唯

「あ・・・！ううん、なんでもない！・・・あ、射つみたいだよ」

ひなた

「・・・」

空

「お疲れ様でしたー」

結果は三位。まあこんなものだろう。地区大だし、インカレの予選ではもつとがんばらなきゃなー。

とりあえずひなたを迎えに行くか。そのあと耕介んとこに行かなきゃな。

唯

「浅倉くん」

空

「おー、浅葱さん。どうだった？」

唯

「かつこよかったよ！ね、ひなちゃん？」

ひなた

「・・・」

ひなたはぶすつとしてこっちを睨んでいる。なんなんだいったい。今回はむしろ労いをもらいたいくらいなんだけど？

空

「はは、まあ優勝はできなかったけどさ」

唯

「それでもすごいよ」

ひなた

「・・・」

空

「おいひなた、なに機嫌悪くしてんだよ？」

ひなた

「べつに」

空

「いや、あからさまに怒ってるだろ」

ひなた

「うるさい！」

そういってぼつと身を翻して走っていつてしまっ。

空

「おいひなた！あーもう！ごめん浅葱さん、また大学で」

唯

「あ・・・うん」

空

「じゃあお疲れ様でしたー！お先あがりまーす！」

部の面々に挨拶して急いでひなたを追いかける。さすがに子供相手のかけっこでは負けるはずもない。

ひなたは俺が追ってきていると知ると、無理にスピードをあげようとしていた。が・・・

空

「あっ・・・!?!」

ボタン

見事に転んでしまった。うわ、痛そー・・・。

空

「ひなた!」

ひなた

「・・・あう・・・」

慌てて駆け寄って見ると膝から血が出ている。けっこう出血がある。ああもう、林檎のときといい、なんでこいつは生傷が絶えないんだ？

空

「大丈夫か?」

ひなた

「平気・・・」

空

「うそつけ。目に涙浮かべてるくせに」

ひなた

「じゃあ大丈夫かなんて聞かないでよ!バカ!」

空

「わかったよ。悪かった。さ、傷見せてみ?」

おずおずと足を伸ばすひなた。スカートが災いしてもらに皮がはがれている。ひなたの顔を見ると涙目になっている。

空

「うーん、皮がはがれちゃったな。消毒しないとな・・・」

とりあえず水だ、水。近くに水道は・・・お、あった。さすがスポーツ公園。

空

「よっと」

ひなた

「なっ・・・!？」

ひなたは俺が両手で抱っこするとボンと顔を赤らめた。なんだこの普通の女の子の反応は？おまえはもっとつつんきゃラじゃなかったのか？

空

「あー、暴れるな。どーせ今動けねえだろ」

すぐに水道の側までひなたを運ぶと、荷物から綺麗なバンダナと包帯を取り出した。

空

「すこししみるぞ」

ひなた

「・・・ん」

水でぬらしたバンダナでそつと傷口に触れると、ひなたの顔がぐつと歪んだ。歯を食いしばって耐えているようだった。可哀相だけど仕方ないね、こればっかは。

ひなた

「・・・いたっ・・・！」

空

「がまんしろ」

ひなた

「ん・・・！」

空

「よし、と。あとは・・・」

そこでもう一枚バンダナを出してゆっくりと傷口にまいていく。その上から包帯で少しきつめに固定した。

空

「どつだ、痛むか？」

ひなた

「だいじょぶ・・・」

そつは言うが、けっこつきつそつだ。はあ・・・。しかたないな。

空

「とりあえず消毒したいからまずバイト先に行くからな。そこでもっかい治療するから」

背中からひなたが頷く。

まあひなたは軽いからたいして苦勞もしない。むしろ背負うまでに苦勞したけど。

「そんなことできるわけないじゃん！」とか言っつて頑なに背中に乗るのを拒んでいた。つーかできないのはその足で歩くことだろーがよ、チビッコ。

空

「しっかし、なんで逃げたりしたんだよ？」

ひなた

「・・・」

空

「おい、どーしたー？」

ひなた

「うるさい・・・」

空

「あーあー、そーですか、わかりましたよー。ったく、世話の焼けるやつだ」

ひなた

「でも一応・・・ごめん」

空

「え？」

ひなた

「だからごめん。あたしが悪かった」

おお？

ひなたが謝った・・・？なんだ、なにか心境の変化があったのか？それとも弓道してる俺を見て見直したとか？でもあれか、一応親密度は上がってる？

空

「ん、気にするな」

ま、こんなひなたのほづが可愛くていいけど。見た目は普通に可愛
いんだからもっところならいいのにな。

ひなた

「ほら、早くしてよ。とろいなあ」

空

「黙れチビ」

前言撤回。やっぱり可愛くなー。

空

「こんにちはー」

耕介

「ん、空か？」

空

「よー耕介。手伝いに来たぜ」

耕介

「まったく、今日くらいよかったのに……ってひなた!?!どうし
たんだ?」

ひなた

「……」

空

「ん、ちょっとはしゃいじゃってな。悪い、俺がもつと見てればよかった」

耕介

「いや、いいさ。控え室使ってくれ。俺、今ちょっと手が離せない」

空

「わかった」

そういつて控え室に入ると、ひなたをパイプ椅子に座らせる。

空

「さて、と」

包帯をはずすと、バンダナが赤く滲んでいた。それでも止血は出来ているみたいだ。とりあえずこれで……。

空

「また染みるけど、がまんな」

ひなた

「……うん」

なるべく痛くしないようにゆっくりと消毒液をつけていく。

ひなた

「んっ……！」

それでもやはり痛むようだ。可哀相だけど仕方ない。その後バンドエイドを慎重に貼って、固定するだけだ。

空

「ほい、終わり」

さっと包帯を巻きなおす。これでなんとかはなつたはずだ。

空

「あとは一週間もすればなんとか治るかな。なかなかいい怪我の仕事だったみたいだ。怪我中の幸いだな」

ひなた

「バカ！」

空

「ごめんごめん……?」

ひなたを見ると僅かに目に涙を浮かべている。やっぱり相当痛かったみたいだ。

空

「ほら泣くな。もう大丈夫だからさ」

ひなた

「な、泣いてなんかないもん！」

空

「無理すんなつての」

ひなたの頭をぽんぽんと叩く。小さい頭だな。

ひなた

「~~~~~っ!!!!」

しゅっつと煙が出るかのような勢いでひなたの顔が紅潮していった。なんだ、怒らせたか?・・・退散退散。

空

「ん、じゃあバイトだから。今日は早く上がれるからちょっと待ってな。じゃあな」

ひなた

「あ……」

なにか言いたげだったが、まあそれは帰りでもいいだろう。結局、黙ったままだったけどね。

空

「あー、ひなた。そのみりん取って」

ひなた

「ん、わかった」

空

「あとこれ味見」

ひなた

「……ちよつと薄いかな。もっと濃くしてよ」

空

「了解であります」

なんだかんだでこの藤咲兄妹と同居を始めてから一ヶ月が過ぎた。なんとか順調に金も溜まり、これならあと一ヶ月後にマイルームを取り戻せそうだ。

そしてはじめはあんなに尖っていたひなたも、ずいぶん普通に接してくれるようになった。とりあえず

「おはよう」と

「おかえり」を言われるようになった。ただでもおおきな進歩だろう。

空

「そついや学校はどうなんだ？」

ひなた

「どつつてべつに。つまんなくもないけどおもしろくもないかな」

空

「はは、俺と同じだな」

ひなた

「そらも？」

空

「まあなー。だいたい俺、あんま友達いねえし。浅葱さんとかがたまに話しかけてくれるくらい」

ひなた

「・・・む」

空

「む？」

ひなた

「・・・なんでもない」

空

「へんなやつ」

これが、最近の日常。

ぶつちやけ、悪くないね。

空

「ありがとうございますー！」

バイトも佳境を越えて、ようやく楽な時間帯となってきた。耕介も壁に寄りかかって一息ついている。でもきついことにはかわりない。ちよつとしたところで体を休めるテクニクが自然と身につく。

と、そうしているとまた来客が来た。仕事再開！

空

「いらつしゃいませー！お客様何名様……ってうおい!？」

ひなた

「なによ」

空

「ひ、ひなた!？」

そのいつもの髪飾りをつけたひなたがむっとした表情を浮かべた。

空

「な、なにしにきたんだよ？」

ひなた

「食事に決まってるじゃない」

空

「あ、あのねえ……」

耕介

「おーい、どーした空……ってひなた!？」

ひなた

「や、あにき。御飯食べに来たの」

耕介

「ってここは居酒屋だつてーの!」

小学生が食事に来るところではないし、つーかもう十時くらいなんですけど？

空

「おい、ひなた。夜中に出歩くなってあんなに……」

ひなた

「そらからは言われたことないわよ」

空

「ぐ……」

耕介

「いや俺は言ったはずだぞ。兄貴だからな」

ひなた

「ごめん、あにき。でもおなかすいちゃって」

耕介

「だからってこっちの都合も考えてくれ、妹よ・・・」

耕介と二人してため息をついていると奥から店長が出てきた。

鹿島

「おーい、どうしたー?」

そこで頭を下げて事情を話すと、店長の鹿島さんは笑ってひなたを迎えた。この人も器量も計り知れない。

鹿島

「いらっしやい、ほら空!お客様を案内して!」

空

「って店長!?!こんな子供を居酒屋に入れていいんですか?」

鹿島

「まずいね」

空

「いや、あの・・・?」

鹿島

「だから耕介か空がこの子と食事してあげて。もう客足もないし、それなら問題ないだろう?」

空・耕介

「・・・」

ひなた

「ほらそら!早く案内してよ」

空

「……一名様ごあんないです!!」

やけになって叫んだ。ひなたは満足げに笑ってたけど。このガキ、いつか社会勉強させてやるうか？

空

「……で、なんで俺が相手せにやあならんのだね？」

耕介

「それはこんなところで妹と食事なんてまっぴらだということでありませぬ。つーか冗談じゃない。誰が好き好んでバイト先で妹と食事を楽しむものか。俺はシスコンじゃないんでね、空と違ってな」

空

「シスコンじゃねーよ! つーか妹いねえし! つまり俺はしょーがねえーから敗戦確定の戦地に送られた衛生兵かー!？」

耕介

「一層の活躍を期待する。骨は拾ってやるから安心して散ってこい」

空

「不公平だつ! だいたいなんでいつつもいつつもあのチビのお守りをせにやならん!？」

ひなた

「そらー! オーダーまだー!？」

耕介

「ほら、ご指名だぜ。お客に不快な思いはさせるなよ?」

空

「ここはホストクラブか!？」

ひなた

「そおーらあー!!」

空

「はーい! ただいまいくでありますよちくしょー!!」

ひなた

「おいしい。そらのよりおいしいかも」

空

「そりゃそうさ。店長の料理には勝てんからな」

ほんとあの人には勝てる気がしない。なんでもっと有名になってないんだ？

ひなた

「そらのやつも頂戴」

空

「っておい！これは俺の楽しみにしてた湯豆腐・・・ってあああああ
！！？」

ひなた

「うん、これもいける」

空

「て、てめえ！金も持たずに来たくせに俺の料理まで食うとはいい
度胸すぎなんじゃねえーのか！？」

ひなた

「なによ！だってそらはあたしの保護者じゃん！」

空

「それは耕介だろーっ！」

ひなた

「今は同居してんだから似たようなものよ。あたしみたいな可愛い
子の保護者で嬉しいでしょ？」

空

「獰猛な犬を飼ってる気分だぜ」

ひなた

「なんですって!?!もうそらの馬鹿!?!」

そういいながらもひなたの箸は止まらない。ああ!?!天ぷらまで!?!

耕介

「はい、刺身盛り合わせおまちどうさまー」

空

「おい耕介、代われ」

耕介

「申し訳ございません。当店ではそのようなサービスは行っておりません」

空

「てめえの義務だからあ!?!」

ひなた

「デザートにあんみつ追加」

空

「まだ食うのかよ!?!」

耕介

「今日は冷麺もおすすめですよ」

ひなた

「じゃあそれも追加」

空

「耕介!?!てめえなにを……!?!」

耕介

「商売に決まってるんだろ。こっちは慈善事業じゃないんでね。しっかり食べてもらっせ」

空

「だからそれは俺の金・・・」

ひなた

「そら、食べないの?」

空

「あつ!!?俺の冷奴!?!」

結局この日、バイト代から五千円が消えた。おいこれはなんのいやがらせだ?

耕介

「そっぴや空つてもうすぐ誕生日じゃなかったっけ?」

空

「ん、ああ。そっぴやそっぴや。自分でも忘れてたけど」

耕介

「じゃあなんかお祝いしなきゃな。なあひなた」

ひなた

「なんであたしに言うのよ」

空

「いっぴやいっぴや!どうせその日はバイトだしな。気持ちだけでもらっぴやおくよ」

耕介

「んー、じゃあ今度振り替えて祝うか。なあひなた」

ひなた

「だからなんであたしに言うのよ!」

やれやれ、賑やかな朝だこと。

まあ祝ってくればうれしいけどそんな暇ないしな。それにどーせひなたが渋るに決まっぴやる。

ひなた

「・・・」

なぜそんな俯いて黙っているんだ、ひなた。ここ最近キャラが違う気がするんですけど？・・・ま、いつか。

空

「さて、とりあえず大学行きますか」

耕介

「おう、がんばってな」

ひなた

「・・・」

なんかひなたが考えこんでいるみたいだけど、まあいいや。

空

「んじゃね」

そういつて今日も大学へと向かっていった。

唯

「浅倉くん、おはよう」

空

「あー、浅葱さん、おはよー」

うん、今日もまぶしいねー、この人は。白いコスモスは最高の癒しだね。

凜

「おっはー、そつらちゃん！」

空

「ああ、ついでにおはよ」

凜

「ついで？」

やばっ！目が怖い！？

空

「ご機嫌麗しゅう、凜様」

凜

「うむ。下がってよいぞ」

空

「ではでは……さらば鈴娘」

凜

「……って待てー！だれが鈴娘じゃあー！」

空

「なんだよ、下がっていいんじゃないのか？」

凜

「朝っぱらからあんたと漫才する趣味はないわ。この甲斐性なし！」

漫才と甲斐性がどう関係するんですか、五十鈴凜さん？っーか一番ノッテた癖になにを言うか。

唯

「どうかした？なんか渋った顔してるよ」

空

「え？まじですか？」

唯

「うん、ほら」

と、手鏡を出す浅葱さん。むー？

空

「・・・いや、自分じゃわからんよ」

唯

「あはは、そうかもね」

凜

「鈍いだけじゃない？」

空

「黙れりんりん女」

凜

「さつきから私を変な呼び方で呼ぶのやめてくれないかな！私には五十鈴凜っていう崇高で華麗な名前があんのよ！」

空

「崇高？華麗？凜、おまえ頭大丈夫か？それは賑やかでおめでたい名前っていうんだよ」

凜

「ふっ！！」

ヴウン！！

空

「ひっ！！！？」

凜

「次は頭よ」

空

「すいませんでした」

神速の速さで頬をかすめた凜の足が下がつてゆく。くそつ、また蹴りにモノを言わせやがって！脅迫だろ、暴力はんたーい！！

唯

「相変わらず仲いいんだね。羨ましいな」

凜

「でしょー もうそろちゃんと私はナイスタッグだからね」

空

「・・・あなたの目は節穴ですか」

唯

「ううん、私にはわかるの。二人は仲がいいんだよ」

凜

「ふへ・・・？」

空

「んあ・・・？」

俺と凜が同時に間の抜けた声をあげた。おや珍しい、あの凜も呆気にとられているよ。

凜

「ちょ、ちょっと唯？いきなりなにいうのよ、私とそろちゃんはべつに・・・」

唯

「だから仲良くねっ？」

につこりとまるで太陽のような笑顔を向ける浅葱さん。ま、まぶしすぎる……！こんな笑顔を前にこれ以上言い争いをしろってほうが無理だ。

それは凜も同様のようで俺と浅葱さんを交互に困ったように見ている。

凜

「まあ……そうね。今日は唯さんに免じて許してあげるわ」

空

「まったく、俺も浅葱さんに免じて許してやるよ」

今日は俺も凜も浅葱さんに負けたな。まったく、たいしたもんだよ、浅葱さんは……。

空

「なんかひなたにふりまわされて疲れるんだよなー」

唯

「そうなんだ、でもそれって好かれているんじゃない？」

凜

「そらちゃんは何気に面倒見いいからね」

空

「うーん、あんな愛情表現は勘弁してほしいけどね。獰猛な犬と友達にはなりたくないし」

唯

「そうかな？ひなちゃん、すごいいい子だったと思うけど？可愛いし」

空

「ありゃ猫を被ってんだよ。家じゃ噛み付いてくるんだぞ?」

凜

「相変わらずちっちゃい子には人気じゃん でも襲っちゃだめよ?」

空

「襲つか! つーか俺が襲われてんだよ」

凜

「いいじゃん、ちっちゃな女の子に襲われる! . . . うわぁ、そらちゃんそついう趣味?」

空

「一人で勝手に捏造するな!」

「たく、この女はいつつもいつも. . . !」

凜

「でももうすぐ誕生日じゃん。なにか祝ってもらえるんじゃない?」

唯

「あ、誕生日すぐなんだ?」

空

「うん、今度の土曜日かな」

唯

「ん、そっか」

空

「ま、夜の八時までバイトなんだけどね。だからあんまり気にしてないけどさ」

唯

「ふーん. . .」

意味深な笑みを浮かべる浅葱さんだったが、とくに深くも考えなかった。

凜

「じゃあそらちゃんにはなにかプレゼントをしようか！リクエストある？この凜ちゃんが祝ってあげるよ！」

空

「豪華絢爛焼肉セット八千五百円（税抜き）」

凜

「・・・は？」

空

「・・・ダメ？」

凜

「ちよつとー、そらちゃんは料理得意でしょ？もっとましなもの言いなさいってば」

空

「じゃあ百花繚乱包丁十二点セットを・・・」

凜

「あるの？それほんとに売ってるの？」

空

「ネット販売でなら」

凜

「はぁ・・・あんだねえ、せつかく女の子が誕生日プレゼントあげるって言うてんのよ？もっと気の利いたものはいえないのかな？」

唯

「くすくす」

空

「そういうのは催促はしないものさ。気持ちだけでもいいんだぜ？」

凜

「そついつとこはかつこつつけるね？」

空

「べつに」

そんな強欲でもないし。

唯

「あ、じゃあ私はクッキーでも焼こうかな」

空

「む？」

凜

「え？」

俺と凜の目が同時に浅葱さんを捕らえた。今度は浅葱さんがぼけっ
としてるし。

空

「ほう……」

凜

「唯、勇気あるね」

唯

「え……え……？」

凜

「そらちゃんはおかしから料理だけは一流だね。だからこいつにク
ッキー渡してもその舌にかなうかどうか……」

唯

「は、ほう……？」

凜

「私でも料理は勝てないしね」

空

「っーか料理できたっけ？」

凜

「できるわよ！……、まあ少しくらいなら……」

空

「そうだな、卵焼きくらいはつくれないとな？」

凜

「うう！なんでこんなやつが料理できるんだ・・・」

空

「こんなやつとはなんだよ・・・」

唯

「うう・・・」

凜

「あ、唯、でも大丈夫だよ」

唯

「ほえ？」

凜

「そらちゃん、これでもフェミニストだからちゃんとして食べてくれるよつ。それに唯の腕なら心配ないよ」

空

「フェミニストかどうかはこの際どうでもいいが・・・もちろんよろこんでいただきますよ、浅葱さん」

唯

「そう・・・？じゃあがんばってみるよ」

両手を胸の前で組んで気合を入れる浅葱さん。うーん、なんかいいねー、役得だな。考えてみれば甲斐嶺大学の白いコスモスと呼ばれる浅葱さんから手作りクッキー確約・・・うわ、じつはすごいことなんじゃねーの、これ？喜ぶべきところでしょう？

空

「嬉しいな！ありが・・・」

ブルツ・・・！

空

「うっ……!?!」

な、なんだ……?今周りのやつらから殺気を感じたような……

(汗)

……ま、気のせいにしてこ(苦笑)

そして誕生日当日。

相変わらず忙しいバイトをこなし、ようやく終了。ぐはぁ……。

空

「だりー!」

耕介

「はは、お疲れ」

空

「帰って寝たいぜ……」

耕介

「そうしとけ」

空

「おう……んじゃ先に上がるぜ」

耕介

「おつかれー。まっすぐ帰れよー」

空

「俺は小学生か!」

ふーっと息を吐いて外に出る。今日の空はまた一段と美しい!まるで俺を祝福しているようだ……なんて詩的なことを考えてみる。……誕生日だからってそんなことはないんだけどね。

空

「あー？」

あの背丈、あの髪飾り。ひなたか・・・？
なにやっつてんだ、あんなとこに隠れて。なにか様子を伺っようつにち
らちらとこちらを見ているようだけど・・・、はて？

空

「おーい！ひな・・・」

唯

「浅倉くん！」

空

「たー・・・？」

唯

「こんばんは」

空

「あ、浅葱さん？」

唯

「へへ、今日誕生日だって言ったでしょ、はいこれ」

と、なにやら可愛い包みが・・・。

空

「えっと・・・これはまさか」

唯

「うん、プレゼント」

空

「ほ、ほんとに？」

唯

「クッキー焼いたの。よかったら食べて？」

空

「あー、ありがとう！」

うお、なんかあったかいぞ？もしかして焼きたて？

空

「なんか悪いね」

唯

「ううん。クッキー焼きたかったところだったから。食べてみて？」

空

「では……」

包みを開けて一枚取り出す。おお。

空

「う、うまい！」

唯

「ほんと？よかったあ」

空

「浅葱さんうまいんだな。卵黄と砂糖の加減も申し分ない」

唯

「へへ、嬉しいな」

さらにもう一枚頂いた。うん、まじでうまい。なるほど、浅葱さんの腕も相当なものだな、これは。少なくとも凜の数倍は上だな。

空

「ほんとありがとう。しかもわざわざ届けてもらって」

唯

「ううん、せっかくの誕生日だもん。その日のうちにお祝いしたかったんだ」

空

「それにしたって……」

唯

「へへ、人のお祝いは素直に受け取るものだよ？それに代償を期待してるわけじゃないもん。浅倉くんの喜んだ顔が見れるだけで満足だよ」

空

「……浅葱さんが聖母に見えるよ」

唯

「えっ……？」

空

「あなた、素敵すぎ」

ポンツ、という音が聞こえそうな勢いで真っ赤になる浅葱さん。あれ、なんか変なこと言ったか……？

唯

「そ、そそそんなんっ！私なんか……その……」

空

「？……でも本当にありがとう。このお礼は必ずするわ」

唯

「そんなのいいのに……」

空

「俺がしたいんだよ。楽しみに待っててな。浅葱さんのためにとびつきりのもんを用意するぜ」

唯

「あ……っ！」

空

「……浅葱さん？」

唯

「あ……うん……楽しみにしてる、から……！それじゃまた明日ね！」

返事をする前に身を翻して駆けていく浅葱さん。……どうしたんだ？なにか焦っているような……。
あ……そういえばひなたは……？

空

「あれ？」

いない。おかしいな。さっきまで居たような気が……。
つーかなにしにきたんだ、ひなた？

唯

「はあ……はあ……ん……」

家に戻った唯は玄関先でペタンと座り込んで荒い息遣いを必死で整えようとしていた。

唯

「……くやしー」

こんなに胸が苦しいのは、急いで帰ったからでも、空にときめいたのも違う。それがこんなに悔しい。

唯

「はぁ……っん、……っく……！」

よろよろと立ち上がってようやく室内へと入って行った。真っ暗なリビングに入ったところでもまた立ち止まり、やがて消え入りそうな声で呟いた。

唯

「……恨むよ……普通にドキドキもできないなんて……」

空

「ただいまー。おーい、ひなたー！」

返事がない。靴があるからいるはずなんだけど？

空

「ひなた？」

部屋のドアをノックする。返事はないけど、中に動く気配がする。かくれんぼでもする気かよ？

空

「ひなたー？あけるぞー？」

と、ドアを半分開けたところで……

空

「げふっ!!!?!」

なんか急に視界が暗くなって・・・なんか頭にぶつかったような・・・
・・・って・・・。

空

「こらあ！てめえ俺が買ってやった熊のぷーやんをなげやがったなあーっ!!!」

クレインゲームでコンテニュー六回分の成果を!!おまえがわがま
ま言っつて俺に取らせたくせに!!

ひなた

「勝手に入ってこないでよバカ!!」

空

「だったら返事くらいしろ」

ひなた

「うるさいうるさい!!」

ひなたはバーサーカーモード発動ですかー!?

空

「おいまて!さすがにコンパスとか投げんな・・・っついてえー!!」

ひなた

「バカバカバカバカバカバカバカー!!!!」

空

「おい!怒ってる理由がわかんねえっつてえーの!!」

ひなた

「うるさい……！」

空

「だーっ！てめえひなた！！いい加減にしねえといくら俺だっ
……て……？」

……

……

はい？

ひなた

「バカバカ……！！」

空

「……おい、なに泣いてんだ？」

ひなた

「……え……？」

ひなたが今気付いたように目を押さえる。

空

「……ひなた？」

ひなた

「み、みないでよ！」

いやいやいや。

泣いてる子を前にしてなにもしないほどのバカではないぞ。

ゆっくりとひなたの側にいくと、顔を覆っているひなたの前でかがんだ。顔の高さを同じくらいにする。

空

「ひーなたっ、どーしたんだ？」

ひなた

「……」

空

「なにかあった？ってかさっきバイトまで来てたよな？」

ひなた

「……うん」

空

「俺に用だった？」

ひなた

「……ん」

空

「なんだったんだ？」

ひなた

「……」

ひなたが目伏せる。が、その一瞬、床に向けられたの見逃さなかつた。ソレを追っていくと、床に紙の包みがある。たたきつけられたんだらう。形が歪んでしまっている。

そしてそのはしから見える、ぼろぼろになったものは……。

空

「クッキー？」

びくつとひなたが震えると、すぐにそのつつみに飛びついた。

ひなた

「……ん！」

胸に抱えるように隠してしまふ。

空

「あー……」

これはもしかしてそうなんですかー？

空

「俺に、だつた？」

ひなた

「バカ！勘違いしないでよ！これは……ただ失敗しちゃったから
そらに食べさせて笑ってやろうと思っただけ……」

空

「じゃあ笑え。貰うぜ」

ひなた

「あつ……!？」

すつと包みを取り上げて、そのなかのクッキーを取り出す。

お世辞にも上手にできたとはいえない。かたちは歪で、焦げ目もた
くさんある。

それでもためらわずに口に入れる。

空

「ふむ……」

ひなた

「……」

ひなたが凝視するよつにこちらを見ている。

空

「……」

ひなた

「……」

空

「ひなた」

ひなた

「えっ……!?!」

ひなたの頭を撫でながら言う。

空

「おいしいぜ、ひなたのクッキー！」

ひなた

「あ……」

空

「なんだよ、こんなに旨くできんならもっとはやく作ってくれよ」

ひなた

「……うそ」

空

「あー？」

ひなた

「だってあさぎさんから貰ってたじゃない! あんなに美味しいそうに食べてたじゃない! あたしのがそんなおいしいわけ……!」

空

「なら食べてみ？」

ひなた

「むぐっ!?!」

ひなたの小さな口に無理矢理クッキーをねじ込んだ。「ごくん、とひなたが飲み込むのがわかった。

ひなた

「……まずいよ……！」

ひなたの顔が曇る。

空

「そうか？」

ひなた

「無理して食べないでよバカ！あさぎさんのほうがずっとおいしいんでしょ！！？」

ひなたが睨んでくる。その目には涙が浮かんでいる。
……無理しやがって、このバカ。

空

「な、ひなた？ひとつ正直に聞かせてくれないか？」

ひなた

「なによ……」

空

「このクッキー、俺のために作ってくれたの？」

ひなた

「……」

ひなたの目をじっと見る。

ひなた

「……うん」

空

「なら、おっけー！」

ひなた

「え？」

空

「おばあちゃんが言っていた。贈る価値は気持ちの価値だってな。ひなたの気持ちが詰まってるんだ。こんなに嬉しいものはないさ」

ひなた

「~~~~!!!!」

空

「ありがとう、ひなた」

いつもより優しく頭を撫でる。今回は抵抗しないようだ。

ひなた

「ひつく……」

空

「ひなた？また泣いて……っ」と

ひなたが力の限りぎゅっと抱きついてきた。正直不意打ちで焦ったけど。

ひなた

「今顔を見ないで……!」

空

「……わかったよ。胸をお貸ししますよ、姫様」

その小柄な体を優しく包む。

ひなた

「そら……にいちちゃん」

空

「ん？」

・・・あれ？呼び捨てじゃなくなった？

ひなた

「誕生日、・・・・・・・・・・・・・・・・おめでと」

・・・

嬉しいもんだね。

空

「ありがとう、ひなた」

なんとなく、ひなたと打ち解けた気がした。多分、錯覚なんかじゃないさ。

や、やった。ついに俺はマイルームを取り戻せた！くうく、バイトをした甲斐があったもんだ。

空

「聞け！耕介、ひなた！俺はついに部屋を取り戻したぞ！」

大学から帰るなり二人に向かって叫ぶ。

耕介

「ほく。ついに帰れるわけだ」

ひなた

「・・・・・・・・」

空

「世話になったな、藤咲兄妹。三日後からまた向こうに戻ることになった。今までの恩は忘れんぞ。はははは・・・・・・・・ぐうっ！！」

ひなた

「ばかつ！」

またして頭にクッションがぶつけられる。おのれひなた。何故故そんな投石コントロールがいいんだてめえは。ていうか何故このタイミングでぶつけられにやならんのだ、藤咲ひなた！やはりここを立ち去る前にいつペンこの理不尽さをわからせてやろうか！？

空

「く・・・やるなひなた。この二ヶ月のあいだによくもあれだけ奇襲まがいいろいろなぶつけてくれたな」

ひなた

「まだぶつけられたいの？」

空

「ふん、くだらん挑発に乗ってやるか、俺がその気になれば貴様のような小兵など赤子の手をひねるようなもの・・・」

ひなた

「なにを・・・！」

ひなたが大小さまざまなおブジェを持ち上げながら対峙してくる。

無駄に腕力はあるやがる・・・。

それに対して俺も指をちよいちよいと振って

「さあ来い」と挑発する。ふん、これを機会にわからせてやる！俺とおまえどっちが上かってことをなあっ！！

耕介

「ストーーーーップ！！」

空

「・・・ちい」

ひなた

「むう」

耕介の乱入でその騒ぎも収まる。・・・っかとめるんならもっとはやく止めてくれ。この臨戦体勢に費やした気力を返せ。

耕介

「なにコントやってんだ凸凹コンビ。とりあえず飯だ」

空

「そーだな、よし、世話になったから今日は俺が存分に腕をふるってやるよ。よし、ひなた。買い物いくぞ」

ひなた

「なんであたしが？」

空

「耕介がいねえときも多いんだろ。夕飯の作り方を教えてやる。材料の買い方もな」

耕介

「いつてこいよ、ひなた」

空

「・・・ん」

最後にはおとなしくなったひなたが俺のあとをついてきた。こういうところは可愛いんだよな。まあ口にしたら怒鳴られるだろーけど。ていうかひなたは口を閉じれば問題ないのだがね。

空

「ぶいーいー・・・」

部屋のベットに転がって息を吐く。

明日はいよいよ自分の部屋に戻る日だ。なんだかんだでこの家とこの兄妹には世話になったな。

お礼としてたくさん腕をふるってやったし、ひなたにも料理を教え、耕介の頼みでバイトも続けることにしたし、けっこうお返しはできたはずだ。

あとは……ま、ちょっとしたモノか。

空

「うーん」

手には可愛らしいペンダントが握られている。

ひなたにあげようと仕入れたものだ。ま、福引の景品だけどね。ホントは二等の包丁七点セットが欲しかったんだが……。でもまあせっかくだからいただいたものだ。ひなたにくれてやるのが無難な処理法だろう。

空

「ま、さいごくらい格好つけますか」

ひょいと立ち上がって部屋を出ると、

空

「うおっ!?!」

ひなた

「ふえっ!?!」

ひなたがいた。

まるで謀っていたかのように真正面に鉢合わせた。

ん、真正面？つーことはなにか、ひなたは俺の部屋に来る気だったのか？

空

「よう、ひなた」

ひなた

「あ、うん・・・」

なにやらもじもじと両手を後ろにしてクネクネとしている。なんだ？学芸会のダンスでもしてるのか？

空

「どした？まだそんな時期じゃないだろう？」

ひなた

「は・・・？時期・・・？」

空

「あれ？違うの？」

ひなた

「え・・・んと・・・よくわからないけど、これ」

空

「・・・クッキー？」

出してきた手の上に程よく焦げ目のついたクッキーがあつた。以前のひなたのクッキーとは完成度が違う。

空

「ひなたが焼いたのか？」

ひなた

「うん」

空

「餞別？」

ひなた

「一応」

空

「どれどれ」

おもむろに一枚口に入れてみる。

空

「……………」

ひなた

「……………どう？」

空

「……………おお」

ひなた

「おお？」

空

「腕を上げたな、ひなた！」

ひなたの頭をぐしゃぐしゃと撫でてやる。さらさらの髪が指をすりぬけていく。なかなか心地いい。

ひなた

「ぐしゃぐしゃするな〜」

空

「うん、この前よりもバターの味が利いていていい感じだ。それに焼き時間も絶妙だ。……………ひなた」

ひなた

「な、なに？」

空

「いっぱい練習したろ？」

ひなた

「う……………」

ひなたが視線を泳がせる。 凶星か（笑）

空

「さんきゅ、ひなた」

ひなた

「…………あたしだって…………やればできるんだから！そらにいちやんに負けるのも悔しいし……………」

空

「はは！んじゃ一緒に食べるか？」

そうやって部屋でひなたとクッキーを食べながら談笑しはじめた。

ひなた

「じゃあけっこう近いんだ？」

空

「おう、まあ歩いても十五分くらいかな」

ひなた

「そうなんだ」

空

「気が向いたら遊びこいよ。また上手いもの食わしてやるよ」

ひなた

「…………じゃあまた料理教えてくれる？」

空

「ああ、いいぜ。お前も女の子なんだし、料理のたしなみくらい覚えないな」

ひなた

「余計なお世話よ！」

空

「おっと」

ひなたが枕を投げ飛ばしてきたのでさつとそれをかわす。馬鹿め！
貴様の軌道などすで見切っておるわ！

空

「そんな手に俺が何度も……っついてててて……!!??」

ちよっ……噛んだ!? 噛んだよこの子!!? 犬か!?

空

「ちよ……まで! 噛み付くのは反則……いてて!!」

ひなた

「ふんっだ!」

なにをそんなに機嫌を悪くしてんだこの犬ガキ! つーかいてえー……
……って歯型ついてるよ!? 恐ろしい…… (汗)
くそっ! こうなったら俺の切り札を切らせてもらっ!

空

「そんなことすると俺からは餞別やらねえぞ」

そっとうとひなたが目をはちくりとさせた。ニヤリ。

ひなた

「あるの？」

空

「でもどーしよっかなあ」

ひなた

「・・・むう」

ひなたが恨めしそうに見てくる。ははっ、やっぱり欲しいらしいな。頬を膨らませて睨んでるし。

空

「まあいじわるもやめてやるよ。ほら、手だせ」

おずおずと出した手にペンダントを乗っけてやると、珍しくひなたが驚いたように俺を見てきた。

ひなた

「・・・これ？」

空

「ん、饞別」

ひなた

「いいの？」

空

「もちろん。いままでお世話になりました、藤咲ひなたさん」

と、軽くお辞儀をする。見たか、これが大人の対応だ。

ひなた

「・・・もう来ないの？」

空

「ん？来てほしい？」

ひなた

「バカ！そうじゃないわよ！」

ひよいとじゃんぷして俺の背中に張り付いてきた……っつてっお
い！

空

「いててて……！」

ひなた

「あぐ〜」

この噛み付き魔め！いててて！

空

「つたく！素直に言ったらどうだよ？」

ひなた

「なんですって！」

と、怒りかけたところで一言。

空

「俺はひなたに会いたいけどな」

ひなた

「……え」

空

「なんだかんだでひなたといると遠屈しないし。でもひなたが違う
んならしばらくは我慢するかな」

ひなた

「え……っど……」

ひなたが焦ったようにしている。

空

「じゃあひなた、今日でお別れだな。たまには俺を思い出してくれ」

ひなた

「バカ！」

空

「いてて！」

ひなた

「そんなわけないじゃない！」

空

「お？」

ひなた

「・・・まだそらにいちちゃんには料理教えてもらわなきゃなんないんだから！今度はあたしがそらにいちちゃんの家に行くから！」

空

「おお？」

なんだ、やけに素直だな。プレゼント効果か？

空

「はは、うん、待ってるよ」

ひなた

「もう！知らないっ！」

するとひなたは身を翻して部屋から出て行ってしまった。

空

「ふーむ」

なんだか去り際にきてようやくひなたの可愛さがわかってきた気がするな。ある意味一家に一匹欲しいな、あの小動物。・・・いや撤回、いたら毎日生傷がつきそうだ（汗）

ひなたは自室に戻ると、おもむろに右手を開いた。そこにはさきほど空から貰ったペンダントがあった。しばらくじっとそれを見ると、やがて人前じゃ見せないような笑顔を浮かべた。

ひなた
「〜」

鼻歌まじりにそのペンダントをつけると、一時間も鏡のまえに座っていた。

凜
「Yeah!!!」

カラオケは凄まじいテンションで練り広げられていた。名目は俺の家復帰祝いだ、おそらくは騒ぐためのただの餌だ。面子は俺、耕介、浅葱さん、凜。いささかよくわからないメンバーだが、まあ凜がハイマニユーバモード（ようはハイになっている）なのでそこそこのいい雰囲気と和やかに進んでいった。

凜

「ほんと久しぶりだね、耕介！」

耕介

「おう、お前はかわらねえな、りんりん」

凜

「変える必要もないも〜ん。こんな素敵な凜ちゃんのどこに変えなきゃいけないところがあるのよ？」

耕介

「はは・・・その性格も変わらずか」

空

「俺の苦勞もわかるだろ」

耕介

「ん〜、まあな。でもいいじゃねえか」

空

「ん？」

耕介

「りんりん、ちゃんと笑ってるじゃねえか」

空

「・・・そうだな」

凜

「ほらそこお！なにこそこそしてんの！次は凜ちゃんが歌うんだからね〜」

凜がマイクを手に立ち上がる。

凜

「五十鈴凜！行きます！」

アップテンポのいいリズムの曲が流れ出す。

凜

「夢から醒めても・・・この手を伸ばすよー・・・」(*Siiii
y Go Round)

耕介

「おっ、懐かしいねー、りんりんの得意曲じゃん」

唯

「凜ちゃん歌うまいよね」

空

「ほんとに鈴みたいな声だからな」

耕介

「おっと、そういやキッチンとした挨拶がまだだったな。藤咲耕介だ。浅葱唯さん、だっけ？この二人相手に毎日大変だろう？」

唯

「うん、よろしく。凜ちゃんも浅倉くんも、見ていて飽きないから楽しいよ」

耕介

「ははっ！そこは永久にかわんねえからな！」

空

「まったく、腐れ縁ってのは怖いねー」

とかなんとか話してうちに歌い終わった凜がこっちにマイクをよこしてきた。

凜

「よし次、そらちゃん！」

空

「俺かよ！」

チャララララ

空

「・・・む」

凜

「この曲を聴いてもそんなことが言えるのかな？」

ふっ、この曲を聴いては引き下がるわけに行くまい・・・。

空

「ソラ！行きまーす！」

とあるモビルスーツアニメの発進シーンのようなノリでマイクを持って飛び出した。

空

「いくぜえっ！！俺の歌を聴けええっ！！！！」

耕介

「マクロス7!?!」

ナイスツッコミだ耕介！

唯

「あははー、浅倉くんかつこいいよ」

凜

「そらちゃんかつこいいー！」

ははは、すべて歓声に聞こえるぜ！

空

「凍てつく世界に心解き放つ・・・声が鳴り響く・・・」

)*SOUL TAKER(

凜

「ライトニングブレイカー!!!!!!」

凜、それは俺が言いたかったんだぞ（汗）　***

空

「っ、つかれたー・・・」

打ち上げも終わり、ようやく帰路についた俺は心底疲れていた。まるで泥沼を歩いているようだ。足が重い重い。

空

「たりー」

ピピピ

空

「む？」

携帯から着信音が響いた。っーか着信音変えなきゃなー。

空

「俺だ。事件かね？」

耕介『その通りだがその答え方はやめろ』

空

「耕介か」

耕介『確認してから出るよ』

空

「そんなことはいい。それよりなにが事件なんだ？」

耕介『そうだ。あのな、ひなたを知らないか？』

空

「あー、ひなたあ？」

あのチビツコならかれこれ2日は会っていない。そう告げると、耕介から思いもよらぬ回答が返ってきた。

耕介『実はいなくなったんだ』

・・・なんだって？いなくなった？あのチビが？

空

「・・・一応確認する。冗談抜きでマジな話か？」

耕介『そうだ。どーもな、逃げ出したみたいなんだ』

空

「はあ？」

耕介『いや・・・実はな・・・』

空

「・・・」

ピッ

通話を終えて携帯を仕舞うと、大きく息を吐いた。

空

「あの馬鹿・・・」

ひなた・・・くそっ！

空

「ばかひなたああ!!」

思い切りよく駆け出した。

場所は耕介からひなたの行きそうな場所を聞いたので一つずつ潰していくしかない。

脚はもう、軽くなっていた。おそらく、火事場の馬鹿力の二歩手前くらいの力だろうな、と無駄なことを頭の隅で考えていた。もちろん、ほんの一瞬だけ。

ひなた

「ひつく……」

ひなたは一人、神社の鳥居にもたれかかってうなだれていた。

ひなた

「えつぐ……」

嗚咽の聲が辺りに浸透していくが、それを聞くものは誰もいない。

ひなた

「……つく……そら……にい……」

思わず口にしたのはあの皮肉屋でボケてばかりの、年上の男の人。なんとなく負けたくないと思う人。

今、おそらくは一番会いたい人だった。

ひなた

「……………」

もう嗚咽の声も響かなくなってきた。

ひなた

「……………そら……………」

それでも、時折名前を連呼し続けるひなた。

ひなた

「……………どこにいるの……………」

本当は会いにいきたかった。
でも場所がわからなかった。当たり前だ。家の場所は聞いたが、家にいなければそれでアウトだ。

ひなた

「……………そら……………」

???

「……………呼んだ？」

ひなた

「……………っ!？」

ぱっとひなたが顔を上げた。

空

「はあ……はあ……よう、わがママ娘」

ひなた

「そら……にいちや」

信じられない、という表情でひなたが空を見つめた。

空

「や、姫様。こんなところでどうしたんだい？」

ひなたは焦ったように顔を背けた。

ひなた

「な、なんでここにいるのよ!？」

空

「ん?だってナイトはこういうときに現れるものなんだぜ？」

ひなた

「誰がナイトよ」

空

「俺だが、なにか？」

ひなた

「似合わない」

……可愛くねー……と、いつもなら言いたいところだけど……。

空

「まあいいけど。それで、なんで泣いてたんだ？」

ひなた

「泣いてない」

空

「そういう嘘は泣いた跡を残しながら言っても効果はないんだぜ？」

ひなた

「え？」

ひなたが慌てて目をこする。ばかなやつ。

ひなた

「泣いてない！」

空

「はいはい」

ひなた

「それでなんでそらにいちゃんはここに来たの？」

空

「・・・耕介から頼まれた」

ひなた

「あにきが？」

空

「そ。たぶんここだったね」

ひなた

「・・・」

空

「事情も聞いた」

ひなた

「・・・そう」

空

「母さんから逃げてきたって?」

ひなたは顔をゆがめて睨むような目で見返してきた。

空

「でもさあ、なにもこんなとこに逃げなくてもな。いや、こんな時間に出るのが問題なんだがな」

ひなた

「そらにいちゃんには関係ないじゃん」

空

「まあな。確かに俺は耕介みたいに血のつながった兄弟でもないし、ひなたに構う因果はまったくないわけだが・・・」

ひなた

「だったら・・・!」

空

「でも俺はいやだ」

ひなた

「・・・え?」

空

「俺はひなたのこと、これでも大事に思ってるんだ。だから放っておくなんて出来ないね」

ひなた

「・・・っ!!」

空

「深くは聞かない。でもお前がそうしていても、なにも変わらない。逃げずに、ちゃんと向き合う勇氣も必要なんだぜ?俺はそれだけひなたに言いに来た」

ひなた

「向き合う・・・?」

空

「逃げたつて悪くないさ。でもそのかわりなにも変わらない。だからいつかはしっかりと向き合わなきゃいけないんだ」

ひなた

「・・・」

空

「まだわかんなくてもいい。今言ったことだけ覚えておいてくれ」

ひなた

「・・・ん」

空

「じゃ、帰ろうか」

ひなた

「・・・うん」

空

「送っていく。歩けるか？」

ひなた

「ん・・・あ、やっぱり歩けない」

空

「・・・やっぱり？」

ひなた

「えへへ、おんぶ」

空

「それが狙いかい」

もちろん泣きかけのひなたの頼みを断るはずもない。

背中に乗せると、首にぎゅっとひなたの手がからみついてくる。っ

「か息苦しい。」

空

「おい、ひなた」

ひなた

「……ん」

空

「顔が見えないからって泣くのはなしですよ？」

ひなた

「ば、ばっ！」

はは、どうやらもう泣いていたみたいだな。

空

「冗談。泣きたかったら泣いていいよ」

ひなた

「ば……ばか……」

空

「悪い悪い」

ひなた

「……ひっく……うええん」

げ。

マジで泣きやがったよ。

……しゃあねーな。

空

「ひなた」

ひなた

「っく……？」

空

「もし、これから辛いときとか、悲しいときとか、そういつとまに逃げたくなったらさ……」

ここで一呼吸置いてから、言った。

空

「俺のここに来ていいからな」

それはどんなふうひなたには聞こえただろうか。

下手をすれば、俺はひなたの邪魔になりかねないことを言っている。それは俺の願うところではないし、もちろんそうなりそうになっただらひなたを拒否してでも正してやらなきゃいけないのに。
・・・知らなかったな。

俺ってお人よしだ。

ひなた

「・・・ありが・・・とう・・・ばか」

空

「・・・なんでばかを付けるかなあ」

空

「ほい、到着」

ひなた

「・・・」

空

「ひなた」

ひなた

「・・・うん」

ひなたの手を引っ張って三日ぶりの藤咲家へ入っていく。すると

玄関の扉を開けたところで耕介とはちあわせた。

耕介

「ひなた・・・」

ひなた

「・・・あにき、ごめん」

耕介

「心配させるなよ」

ひなた

「うん・・・あの・・・」

耕介

「母さんはもう帰ったよ」

ひなた

「ほんと？」

ひなたが安堵の息を吐いた。

耕介

「悪かったな、空」

空

「別に。ハンバーグ作るより簡単だった」

ひなた

「そらにいちゃん！わたしはハンバーグ以下ってわけ！？」

空

「うおう！？」

ガルルルっ、とひなたが喚いてくる。まずいつ！？ひなたビーストモード発動！？

空

「なんだよ！あんなにおいしそうに食べてたじゃないか!？」

ひなた

「そりゃあ、あのハンバーグは最高だけど……って違うー!!!!」

スパーン!!

ひなた

「ふん！おやすみっ!!!!」

ばたばたとひなたが階段を駆け上がって行った。……おい、それで済ます気か？

空

「ぐう……」

耕介

「わが妹ながら凶暴なやつだ」

耕介は地に伏せられた俺を哀れむように見ている。つーかどこにあるんなハリセン隠し持っていやがった？

耕介

「空」

空

「あー？」

耕介

「マジでたすかった。感謝するぜ、ほんと」

空

「ばーか。気持ちわりいまねすんな」

耕介

「ははっ、そうか」

少しカマをかけたが、ひなたもいつも通りの反応だった。とりあえず心配はないだろう。

空

「なあ耕介」

耕介

「なんだ？」

空

「あまり聞くことでもないと思うんだが・・・なんでひなたはあそこまで母親を毛嫌いしてるんだ？」

耕介

「・・・まあ離婚騒動は話したよな？」

空

「ああ」

耕介

「親権で揉めてたんだ。ひなたをほったらかしでな。それで母親がひなたを引き取る算段になったらしいが・・・まあいまさらなんだよって思っただけだよな」

空

「・・・なるほどね」

まだなにか隠してる気がするが、まあいいだろう。今聞かなくてもいいことだ。

空

「とりあえず護衛任務はしっかりしたからな。報酬は五千でいいぜ」

耕介

「二千に負けてくれ」

空

「はっ・・・いいだろう。ただし利子つきだからな」

そのまま軽く手を振って帰った。
足取りもいつのまにか、また重くなっていた。おそらく、身体がもう限界なんだろうな。

うーん・・・ZZZ・・・ん？

ひなた

「そらにいちちゃん、いつもありがとっ」

は・・・？ひ、ひなた・・・？

ひなた

「ひなたん、そらのこと大好き」

げふっ！！？ひ、ひなたん！？やば・・・猛烈に吐き気が・・・
頭痛も・・・！？

ひなた

「そらにいちちゃん！」

や、やめてくれー！？

飛び掛ってくるひなたにそのまま押し倒されそうになったとき・・・

目が覚めた。

バツ

布団から飛び起きるとすぐさま自分の部屋の景色を見渡す。

空

「よ、よかった・・・夢オチなんてありきたりな展開でほんよ
かった・・・」

ふーっと深く息を吐く。

朝からとんでもない夢を見たもんだ。あの凶暴幼女が180度態度
変えた姿なんて想像しただけで気味が悪い。なにもせつかくの日曜
にこんな目覚めをしなくてもいいだろうに・・・。げっ、まだ六時
半かよ？寝よ寝よ。大好きな特撮番組までまだ一時間半もある。

ピンポーン

空

「・・・」

誰だ！こんなときに！俺は今機嫌が悪いのに！・・・まあここで
怒ってもしかたないっすね。

空

「はい、今出ますよーっと」

ガチャ

空

「・・・え」

ひなた

「おはよ」

空

「・・・」

ひなた

「・・・?」

空

「・・・はは、これは悪い夢だ！。まだ覚めていないんだ！」

ボタン

ふう。なんだ、またひなたが出てきやがって。

ガンガン！！

空

「うおっ!?!」

ひなた

「ちよつと、そらにいちゃん!?!いきなり閉めないでよ!!!」

空

「・・・悪夢は現実となりました、か・・・はあ」

ガチャ

扉を開けると不機嫌面のチビッコが一人。性は藤咲。名はひなた。

空

「よう、ひなた」

ひなた

「む。なによその嫌そうな顔」

空

「おまえさ、今何時だと思ってるの？」

ひなた

「・・・六時半？」

空

「はえーつての！！何でこんな早朝にきやがった！！？」

ひなた

「なによ！せつかくきてあげたのに邪魔だつて言うの！？」

そういうひなたはスタスタと部屋の中に入っていった。つてなにに
！？

空

「あ、おい！」

ひなた

「ふーん。けっこう片付いてんだ？意外」

なに物色してやがるこのクソガキ！

空

「で、なんの用？」

ひなた

「用がなくちゃ来ちゃいけないの？」

空

「あほか」

それは将来の彼氏さんのもも言つてやればいいんだ。ガキめ。

空

「あー、完全に目え覚めちまった」

ひなた

「よかつたじゃない」

空

「よくねえ!」

まあここで言い争っても仕方ない。冷静になれ、俺は大人だ・・・!

空

「で、来てどうする気だったの?」

ひなた

「んゝ、いや別に。ただなんとなく」

・・・ほう?ふん、少しいじめるか。

空

「なんだ。泣きたくなつたから来たのかと思つたぜ」

ひなた

「なつ・・・!!!」

けけけ!ひなたが真っ赤にしてらあ。みたか人間沸騰器!!

ひなた

「そ、そんなわけないでしょ!ばか!」

空

「うおっ!?!」

ガシャン

空

「ああああ!!!?!」

ひなた

「あ……」

ひなたが投げたのは俺の大事なマイPC……ってなんですとー
!?!?

空

「ひなたあつ!! てめえ許さーん!!」

ひなた

「うひゃああつ!?!」

と、ひなたをひよいつと持ち上げた。いわゆるダッコの状態だ。

ひなた

「ちよつ、そらにいちやん!」

空

「ほーら、たかいたかーい!」

ひなたが湯気が出るくらい真っ赤になっている。ふっ、俺も子供相
手にムキになる馬鹿でもない。ただひなたの嫌がることをするくら
いなんてことない。

ひなた

「こらっ! 降ろしなさい!」

空

「ははは! けっこう大きくなったなあ、ひなた」

ひなた

「や、やめろ」

手足をじたばたさせるひなた。はは、こつすると可愛いな、この凶

暴娘も。

ひなた

「ちよつとそらにいちゃん！子供扱いしないでよー！」

空

「はいはい。擬人化ひなたん萌え〜」

ひなた

「ぎじんかって？」

空

「人みたいに言うこと」

ひなた

「なんですって!?!？」

けけけ、いかに暴れようと今の俺には無意味じゃ。それにしてもダツコするとこいつの反応はおもしろいな。これからは対ひなた用の最終兵器として活用しよう。『ダツコ』効果・ひなた無効化（消費SP20）。

ひなた

「そらにいーちゃん。ごはんまだー？」

空

「まだー……って少しは手伝え！このわがまま凶暴幼女！」

ひなた

「ダツコした罰だもん。それにあたしは幼女じゃないもん！」

空

「くっ・・・お前将来は悪女になるぞ」

ひなた

「大きなお世話だもん」

空

「はぁ・・・頭痛え・・・気のせいだと思いたいぜ」

台所で朝ごはんを作りながらひなたと押し問答を続ける浅倉は大きくため息をついた、となんとなくナレーションしてみる。あんまり楽しくない。

空

「おい、勝手に俺の寢床を荒らすな」

ひなた

「いいじゃん。まだ眠いし、御飯できたら起こして」

空

「へーい・・・ん？」

まだ眠い？・・・いやちょっと待て。

空

「おい、だったらなんでこんな朝早くにきやがっ・・・」

ひなた

「すーっ・・・」

空

「寝るの早っ！！？」

振り返るとひなたが俺のベッドの上で丸くなって寝ていた。猫みたいなやつだ。ひなた猫モード？・・・今朝の夢で言えば・・・ねこひなたん？・・・へっ・・・(汗)
いやいや、なに妄想してんだ、俺！今朝の夢とリンクさせる必要ね

「だろ！」

空

「つーかここはひなたの秘密基地ですかー？」

とか皮肉を言いつつも料理の手は抜かない俺もつくづくお人好しだ
と思う。

空

「よし、できた」

プレートにオムライスを乗せて隣の部屋に行く。・・・気持ちよさ
そうに寝てやがるし。

空

「おい、ひなたー。出来たぞー」

ひなた

「すーっ・・・すーっ・・・」

空

「おいひなたー」

ダメだ。まるで起きる気配がねえ。熟睡してやがる。

空

「ひなたちゃん？あなたの大好きなオムライスですよー？」

ひなたの顔の近くに湯気がほてっているオムライスを近づける。お
らどーよ、この見事なオムライス！

ひなた

「ん……」

お。反応した。

空

「ほれほれ、早くしないと覚めちまうぞー」

ひなた

「ん……」

寝ながらくんと匂いをかいている。あはは、ひなたに見せてやりてえー、この間抜け面。写メで撮っておくか？

ひなた

「ん……そらあ……」

空

「あ……？」

ひなた

「……お手」

プチッ

あ、なんか切れた。

空

「ひなたー!!!」

ひなた

「ひあうっ!!!?」

ふたたびダッコ攻撃で目標を攻撃。

っーか夢の中で俺を犬と混同してたなこのクソガキ!さっきの擬人

化癡言の報復かこらあ！

空

「ほーれ、世界一周ー！」

ひなた

「ちょ・・・！そらっ!？」

空

「お、起きた？できたからさっさと食いやがれ、お子様もどき」

ひなた

「いいから降ろせ」

さて、いい加減遊ぶのもあきたし、そろそろ餌付けしてやるか。餌の時間だ、擬獣化ひなた。

空

「ほれ、食べな」

ひなた

「む」

もそもそと食べ始めるひなた。今度はうさぎを見ている気分だ。ひなたの動物百面相、か。ふむ、なかなかおもしろい。

ひなた

「・・・おいしい」

空

「あたりまえだ。誰が作ったと思ってる？」

ひなた

「そらにいちやんはほんと料理だけは上手いよね」

空

「だけ、は余計」

そう言つて俺も自分のオムライスを食べ始めた。
しかし、なんだつて日曜にひなたと朝ごはんを食べているんだ？や
っぱひなたが関わるとペースを狂わされるな……。いや、問題な
のは俺の貴重な休みがこんな小娘のいいようにされていることか。
？。。。。やれやれ（苦笑）

凜

「おっはー！そーらちゃんっ」

空

「おう、凜か。おはよ」

珍しく朝に凜とはちあわせた。相変わらず鈴の音が聞こえてきそ
うな声と元気さだな、こいつ。ほんとはどっかに鈴でも垂らしてん
じやねえのか？

空

「凜がこんなに早く来るなんてどーしたんだ？」

凜

「なによ、いつも違うみたいじゃない」

空

「遅刻魔だろ、凜は」

凜

「やだなー、そんな冗談！」

いやいや、事実だろ。朝に弱いくせに。

凜

「それよりそらちゃん。ちょっと放課後暇？」

空

「なんだ？デートの誘いならもっと上手く言え」

凜

「調子のるんじゃない！」

空

「いてっ」

凜の手刀が脳天を直撃した。・・・これが脚だったら気絶してるな

(汗)

凜

「いいから付き合いなさいよ」

空

「えー？凜と二人かよー？」

凜

「そーいう態度取るんだ？」

凜の目が細められる。なんだか嫌な予感が……。なんだ・・・？なにをする気なんだ・・・！？

凜

「空ー！そうなのね！」

空

「・・・は？」

凜

「さんざん私をもてあそんだ挙句に空き缶みたいに捨てるのね！！」

空

「げふっ！！？」

凜

「空のばかつ！もう私のことなんて・・・っ！！！！うう・・・ひっく・

「……！」

ちよっ……！？こいつ嘘泣きスキルをこんなところで！？
げっ……！？なんだか周りから冷たい視線が……！？

空

「凜！てめえなにを……！？」

凜

「ああ、空がそんな人だったなんて！もう知らないっ！！」

くっ！そういう手段か……きたねえぞ鈴娘！！

空

「わかった！放課後付き合っから捏造するのは止める！」

凜

「ほんと？そら大好き」

一瞬で太陽のような笑顔に変わる凜。……こいつ……敵に
回すとこんなに怖えのか（汗）

空

「……てめー、あとで覚えてるよ」

で、放課後。凜に腕を引つ張られながら甲斐谷アーケード街を連れ
まわされていた。この甲斐谷アーケード街は意外と多種多様の店が

備わっていて、ファーストフードからショッピングまで楽しめるこの町で一番の娯楽街だ。まあ、もっと年齢が低いやつらは新しくできた校外の遊園地に行くんだろーけど。

凜

「よし、次あっちー」

空

「はいはい・・・」

何軒目だよ、おい・・・。つーか俺は荷物持ちじゃねーっての！

凜

「あ、そらちゃん。これいいと思わない？」

空

「はいはい、そーですね」

凜

「わーお！このネックレスも素敵ー！やっぱ巫女でもこれくらいのお洒落はいるよね？」

空

「はいはい、そーですね」

凜

「・・・聞いてないでしょ？」

空

「はいはい、そーですね」

凜

「このあほー！！」

空

「げふっ！！？」

凜の殺人的なつつこみが胸を貫いた。・・・いつか骨折れるぞ・・・

これ（汗）

凜

「いやー、買った買った。満足満足」

空

「よーござんしたねー」

凜は満足げに笑っている。そりゃそうさ、俺に半分も金を出させたんだからな、畜生。

凜

「ねえそらあ。あと一箇所行きたいところがあるんだけどいいかな？」

いいかな？つて、どーせ俺に拒否権すら与えない気でしょ（汗）

空

「どこに行くんだ？」

凜

「星見ヶ丘」

空

「・・・はあ？」

あのカップルのデートスポットの？・・・凜と？

空

「なんでまた？」

凜

「ん〜？だって今日はそらが彼氏なんだよ？」

いつの間にか呼び方がそらちゃんから、そらに変わっているし。何年ぶりかな……。

空

「そんな条件は聞いてないぞ」

凜

「そうだったっけ？」

空

「そうだ。賭けてもいいぞ？」

凜

「でも今聞いたよね？じゃあ今から私たち恋人ね」

空

「なんでだよ？」

凜

「そのほうが雰囲気であるじゃん」

空

「あのねえ……」

凜

「なーに？私じゃ不満？」

うーん。ビジュアル的にはまったく問題ないんだけど……これでも凜は美人だし。なにげに大学でも浅葱さんまでとは言わないがモテるらしいけど……。

空

「そうだねー。ただ……」

凜

「ただ？」

空

「ちよつと色気が不足……がふつ!!?!？」

ちよつ……鳩尾……っ!

凜

「なにか言つたかなー?そーらっ?」

空

「い、いえ……素敵なお姉さんの一日彼氏権、よろこんでいただきます……」

凜

「うんうん、素直な子は好きだよ」

……何故俺はこの女に勝てない?

空

「あんだ、魔女？」

凜

「ふふふ」

意味深な笑みを浮かべる凜。

なんなんだ、一体……。

凜

「なによ?まだなにか言いたそうね?」

空

「べっつにー。なんか凜が彼女つて新鮮味がないなと思つてさ」

凜

「そーだよね、一緒にお風呂もはいつたもんね」

空

「ぶっ……!!!?!」

凜

「まあ昔だけど。いまだっららお断りだわ」

空

「当然だ馬鹿!!」

凜

「あはは 焦ってる」

空

「……ボク、もう帰りたい」

凜

「まだまだあっ!ほら行くよっ!」

空

「だからひっぱんって言って……どうあつ……!!!?!」

凜

「いやあ、綺麗だね」

星見ヶ丘に着いた俺らはとりあえず天体観測している。えーと、あの星が……アルタイルだっけ?

空

「で、凜。用件はなんだ?」

凜

「ムードないなあ。もう少し仮想現実を味わおうとか思わないの?」

空

「なにか？ここでハグハグしてほしいとか言う気ですか？」

凜

「あ、それもいいかも」

空

「それも、ってなんだ！それも、って！」

凜

「まあいいや。あのね、そら・・・」

凜は軽く息を吐くと、幾分か真面目な表情を作った。

凜

「あのねー、ちょっとそらの男としての資質を見たかったんだ」

空

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

資質？・・・いったいなんの？

凜

「しゅめん、そら！でもどうしても気になって」

空

「っーか・・・なんで？」

凜

「乙女の秘密」

空

「乙女ねえ・・・」

凜

「文句あるのかな？」

空

「いえ、べつにー」

凜

「ははは！まあほら、今までそらとは兄弟みたいな関係だったじゃん？だから一人の男としてのそのらの実力はいかに、と思っさ」

空

「それで今日一日、俺を彼氏にして試した、と？」

凜

「うん。えへへ、ごめんね」

空

「言葉ほど謝る気はないだろ？」

凜

「わかってるじゃん」

ため息しかでねえ……。

空

「で、結果どうだったの？」

凜

「んー、まあ悪くはないかなー」

空

「あんまよくないなー」

凜

「まあ基本的にポケキャラだし、ノリはいいけど口は悪い。頭と料理の腕、それに弓道の腕は天下一品だけど、世界情勢には疎いし、なにより鈍い。典型的なマイワールド保持者よね、そらって」

空

「……凜……それは誉めているのか貶しているのかどっちだ？」

凜

「結果言っているだけだよ」

空

「はあ……」

凜

「でもね・・・」

空

「あー？」

凜

「彼氏としては結構いけてるかも。ちゃんと私相手でも気配りしてくれたしね。まあフェミニストだからかな？それにそらは正直かっこいいしねー」

空

「・・・ま、ありがとうと言っておくよ」

凜

「どういたしまして」

やれやれ、まあたまには凜とこうするのも悪くないか。

そついや凜とは今まで何度もこうしたデートみたいなきことはしてきただけど、彼氏彼女みたいなデートはしたことなかったしな。今日は凜も腕を絡めてきたりとやたら距離が近かったしなあ。・・・ま、多少意識してたのは確かだけど。

凜

「ま・・・確かに私にはもつたいない、かも・・・・・・・・・・資格もないけど」

空

「あ？なんか言ったかー？」

凜

「えっ？・・・あ、うん。なんでもない」

空

「へんなやつ」

凜

「へへ・・・・・・・・うん、そだね・・・」

空

「まあなんにせよ、今日は楽しかったぜ」

凜

「はは、私といるんだから楽しいに決まってるじゃん」

空

「その性格が直ればねえ」

凜

「なんか言った!？」

空

「いえ、なんでもありません」

凜

「まったく、その皮肉癖がなかったらいいのに!」

空

「お前こそ自信家過ぎなんだよ」

まあ、それが一番心地いいんだけど。

空

「やれやれ・・・」

凜

「まったく!そらの馬鹿!」

空

「うつせえ!」

あー、馬鹿って言われるとどこぞのチビッコが思い浮かぶな。あのガキの口癖みたいなものもんな。

空

「ふー・・・んじゃそろそろ帰りますか」

凜

「うん・・・そだね」

と、先行して帰ろうとすると・・・。

凜

「あ、ちょっと待った」

空

「え・・・って・・・!」

後ろからぐいつと引っ張られた。

そのままなにかにぐつと引き締められる感触が腰のあたりに広がった。

それが凜の腕だというのに気付くのに二秒もいらなかった。

それに背中には何かが押し当てられているような感触がある。いや、なにかというか、凜の頭だろうな。

空

「おい・・・凜?」

凜

「えへへ、せっかくだから最後までいい思いさせてあげようと思っただけ。この幸せ者っ!どーよ?凜ちゃんにハグハグされる気分は?」

空

「うーん、そうだね・・・けっこつドキドキですね・・・って顔赤くして言うなよ」

凜

「えっ!?!」

空

「ばーか、なに焦ってた。後ろから抱きつかれて顔見えるわけねーだろ」

凜

「あつ!？」

空

「おい、ほんとに赤くしてたのか？」

凜

「・・・むう」

空

「つたく・・・」

凜

「・・・」

空

「・・・」

き、気まずい……。相変わらず凜に固定されているから動くに動
けねーし、この空気じゃなに言っ方がいいかもわからん。
そついや凜とこんな雰囲気になるなんてなかったからな・・・あつ・
・・・ど、どーすれば・・・!？」

空

「あの一、五十鈴凜さん？」

凜

「なーに？」

空

「いつまでこのまま？」

凜

「んーと・・・もうちょっと」

空

「もしかして凜がこうしていただけなんじゃ・・・」

凜

「かもねー まあいいじゃないか、少年よ!」

空

「同年でしょ」

凜

「きゃはは」

はぁ……軽い拷問だぜ、こりゃあ。

それでもしばらくは、開放されなかったけど……（苦笑）

空

「じゃあなー、凜」

凜

「ばーい」

私はいつもどおりの笑顔でいつもどおりの態度のそらちゃんを見送った。

凜

「……はぁ」

そらちゃんの姿が見えなくなったと同時にため息がでた。

凜

「……」

やっぱりそらちゃんはいつも通り、か。

少しは焦ってたけど、こんなにアピールしても多分気付いてないな
ー。

やれやれ。

凜

「そらちゃんは皮肉屋すぎ。そして私が自信家すぎ、か」
たしかにこれじゃあ進展なんて望むのはおかしい、かな。

凜

「あーあ、どうしようか」

今日は少し探りも入れる意味もあつたけど・・・多分玉砕気味かな。

凜

「なに焦ってるんだろ、私・・・」

いや、理由はわかってる。

知ってしまったからだ。

そらちゃんのことを想っている子がいることを。

確証はないけど、ほぼ確実だ。

凜

「がんばらないとなー・・・私も」

ひとりでよしと気合を入れた。

もしかしたら、人間関係に亀裂が入るかもしれないけど・・・でも、私だって諦めたくないことくらいある。

凜

「でも・・・鈍い性格知っただけ、これは大変になりそうだな
」

そう夜空にぼやいて、私も家へと帰って行った。

凜

「でも、本当にいいのかな……？私は……」

空

「うー……」

眠……眠いよ……。

昨日は凜にさんざん振り回されたからな。ああ、節々が痛い。

……

それにしても……

空

「……情けねー。まだ感触が残ってやがる」

昨日のあのとき、凜に抱きしめられた感触が抜けてない。一晚経てばなくなると思ってたんだけどな。

空

「凜……」

なんだってあんなことを……。

空

「あの鈴娘め……」

まあ、考えても仕方ない。ここはいつも通りに行くのが一番ぞ。ど
ーせまた大学で会えばいつも通りになっているんだ。

空

「うし！」

気合を入れて布団から飛び出た。エネルギー充填100%！！

空

「うつしやあ！気合入れていくぜー！」

ひなた

「どこに行くの？」

空

「あー？そりゃもちろん大学の講義……へ？」

ちよつとまで。「この声はまさか……」

空

「……」

ゆっくりと首を振り返らせると、そこには……。

ひなた

「おはよ」

空

「……」

ひなた

「……おはよ」

空

「……」

ひなた

「おはよー!」

空

「ああ……おはよう……じゃねえー!!!!!!!」

いたのはもちろん、神出鬼没の藤咲ひなた。ついかどこから入ってきやがった?お前は忍者か!?

空

「なんでここにいるんだ!?!」

ひなた

「遊びにきたの」

空

「学校は!?!今日は平日……」

ひなた

「創立記念日で休み」

空

「それはおまえのそこだけだったの!!!小学校と大学の予定をリンクさせるな!」

な、なんだってこんなにいつもいつも突然現れるんだよ、ひなた。理由があれば聞いてやるから言ってくれ!

空

「……はあ、もういい。なんか気分じゃないし、今日は学校さぼる」

ひなた

「いいの?」

空

「もとから無理にテンション上げようとしてたんだ。ま、ひなたの

お陰でもとに戻されちまったけど」

ひなた

「ふーん」

空

「つーかさ、どうやって入ってきた？」

ひなた

「ばか？鍵開いていたわよ」

・・・マジ？そんなに動揺してたのか、俺。

空

「なっさけねー」

ひなた

「なにが？」

空

「いや、こっちの話」

ひなた

「・・・じゃあさ、そらにいちゃん・・・」

空

「あー？」

ひなた

「りん、って誰？」

空

「がふっ！！？」

な、なぜこいつが凜の名を！？

空

「なんで知ってる！？」

ひなた

「だってさつき寝言みたいに言ってたじゃん」

空

「……我ながら油断した」

頭を抱えてため息をついた。

ひなた

「ねえだれだれ？」

空

「あーっと……浅葱さんには会ったよな？そのお友達」

うん、間違ってる。

ひなた

「そらにいちゃんとは？」

空

「あー、お友達」

ひなた

「へー……」

空

「ん？なんだその目は？」

なんだか思い切り疑っている目だぞ？そんな眼で見るな！お兄ちゃん
んは悲しいぞ！？

ひなた

「べつっにー？彼女ならそつえばいいのに」

空

「なっ……!？」

ひなた

「あ、図星・・・？」

空

「ははは！何言ってるんですかひなたさん！僕に彼女なんているわけないじゃないですか！」

ひなた

「そういつの、きよどーふしん、っていつんだよね？」

空

「うぐ！？」

なんて正確なつつこみだ・・・。

最近のガキはこんな言葉まで覚えてやがるのか・・・。あ、そういやこのチビッコはけっこう良いところに通ってたよな。

空

「はあ・・・まあとにかく凜とはなんでもない」

ひなた

「そ」

空

「ああ・・・って・・・」

なんでこんな小学生相手に真面目に言ってたんだ？なんか浮気がばれそうなお男みたいじゃねえか。

・・・なんか遊ばれたようでおもしろくないな。ちょっとからかってやるか。

空

「なんだ？そんなに俺が女といると気になるのか？」

と、いつもの調子を取り戻すためにそんなことを言ってみる。

ここではかの一言でも言われればテンションもいつも通り・・・、

Yeah!!

ひなた

「そりゃあ……」

……いつも通りにな……らないね。

……って、なんですとー!!?」

空

「あー……今なんて言った?」

というと、ひなたがはっとなっていきなり顔を真っ赤にしながらかんできた。

ひなた

「な、なんでもないわよ!んなわけないじゃん!ばかっ!!!」

空

「……嘘くせー」

ひなた

「そんなことないもん!」

手足をばたつかせて否定している。……なんか頭が痛くなってきた。

空

「で、遊びに来てどうするつもりだったんだよ?」

ひなた

「えーと……遊ぼ?」

空

「だからなにして?」

ひなた

「うーんと・・・」

左右に首をひねりながら考え込むひなた。・・・今考えることかよ。それなら決めてから来いよ・・・。ここは児童相談所じゃねえんだよ。

ひなた

「えつと・・・」

・・・まあでも、せつかく来てくれたわけなんだし。

空

「しゃーねえ。どっか出かけるか？」

ひなた

「・・・うん！」

子供のお守りは趣味じゃないんだけどねー。まあ仕方ないか、たまにはチビッコにかまってやろうかね。まあひなたも嬉しそうだし、いつか。

ひなた

「うわー、すごいねじじー！」

空

「オープンしたばっかだしな、それに平日だから客も少ない。いいときにきたな」

ひなた

「はやくいじじいよー」

空

「引っ張るなつての!」

そんな感じで遊園地へと入っていった。この遊園地『独楽鳥ハイランド』は新興の娯楽施設として先月オープンしたばかり。そのためアトラクションもなかなかいいものが揃っている。

そのせいか、なんとなくひなたもいつもよりも子供っぽい気がする。いやまあ子供なただけだね。でもなんかいつもは背伸びばっかしてるからこつした素直な反応はむしろ珍しいかもしれない。もっと早くから・・・いや、はじめっからこつならよかつたのに(苦笑)

空

「さて、それじゃなにから・・・」

ひなた

「あれ!」

空

「えーと・・・なつ!!?」

ひなたが指定したのは『超級怒涛!世界最高最速落下マシン、唸れ!!メテオストライク!!』という乗り物。

・・・

「・・・じよ、冗談じゃねー!?!?!そんなもん唸らんでいい!!」

空

「・・・あ、あのさ、ひなた?あれはちょーつと刺激が強すぎる気が・・・」

・・・

ひなた

「・・・そらにいちゃん、怖いんだ?」

ひなたがニヤリと挑発的な笑みを浮かべる。え、俺、舐められてる？

空

「はっ！この俺がこんな機械なんかで・・・」

ひなた

「決定」

空

「・・・・・・・・・・・・俺の馬鹿ー！！」

ひなた

「ぶーぶー！」

空

「そんなに膨れるなって」

ひなた

「だってー！」

空

「仕方ないだろ、身長制限なんだから」

ま、内心ひなたのチビに感謝していたけど。あと七センチひなたが大きかったら地獄を見ているところだった。つーかそこまで身長が伸びたらもうここにひなたとは来ないようにしよう。それにしてもひなたは絶叫マシン平気なのかよ・・・。末恐ろしいガキだ・・・。

ひなた

「でも私は無理でもそらにいちやんなら乗れたんじゃ・・・」

空

「おっ！ひなた、あっちにおもしろそーな乗り物があるぜ、行ってみよう」

ひなた

「あつ！手引つ張らないですよ」

・・・セーフ。絶対そんなもんに乗ってたまるか！！

ひなた

「じゃあ・・・そらにいちちゃん、観覧車乗る？」

空

「観覧車ねえ・・・」

ひなた

「なに？」

空

「いや、やっぱりお子様はこういう乗り物のほうが似合ってるなと思っただけ」

ひなた

「むー」

膨れっ面をつくるひなたを横目で見ながら笑いを堪えた。はは、やっぱり子供だな、こいつも。

空

「ほら、行くぞ」

ひなた

「あ、待ってよー」

そっぴや観覧車乗るなんていつ以来かなー。

空

「よっど」

おもったより揺れるなー。

ひなた

「よいしょ……」

ひなたと向かい合わせに座った。ちょこんと座ったひなたは僅か数秒後には狭い観覧車の中をぐるぐると回り始めた。落ち着きのないやつだ。

ひなた

「はうー」

体をくねくねとしながら四方八方の景色を眺めているひなた。籠の中を走り回るハムスターみたいだ。

空

「騒がしいやつ……」

ひなた

「あ、甲斐谷駅だ。こっから見えるんだねー」

空

「おーい、もうちょっと落ち着いたら？」

ひなた

「むー」

そついうとひなたはちょこんと再び椅子に座った。

空

「今日は素直じゃん」

ひなた

「いつも素直だよ」

空

「・・・素直って言葉の意味は学校じゃ教えてくれないのか？」

ひなた

「そらにいちゃん！」

空

「あー、冗談だつて」

ひなた

「まったく・・・ばかなんだから」

空

「はは・・・それにしてもなんか今日はひなたは感じが違うな？」

ひなた

「えっ？」

空

「いや、なんていうか・・・」

ひなた

「なんていうか？」

・・・はて？

上手い言葉が出てこないな。とげとげしさがなくなって、それだなんか前よりも素を出してくれているような感じ・・・うーむ？ひなたを見ると上目遣いに不思議そうな顔してこちらの返答を待っている。

空

「今日のひなたは・・・」

ひなた

「うん」

・・・やれやれ。

空

「可愛いな」

ひなた

「……え……」

ひなたの顔が急速に赤くなっていった。いや、まあ言った俺もけっこう恥ずかしかったんだけど……。

ひなた

「な、なななに言っ……」

……まあ毒を食らわば皿まで。正直に言っ……てあげようかね。

空

「今日はなんだか可愛いなって思っただけ。なんつーか、前はつんつんとしてたけど今はなんか普通に仲良くしてくれているじゃん？だからかな？でもそのほうがいいぜ。怒っているひなたもけっこう可愛いけど、今みたいに笑っているひなたのほうが魅力的だぜ」

目を丸くしたひなたが思いつきり真っ赤にしながら慌てている。わかりやすいな。

つーか沸騰器のメーターみたいだな。

ひなた

「……あ……ありがと……」

空

「いやいや」

ひなた

「……そらにいちゃんも……」

空

「んー？」

ひなた

「そらにいちちゃんも……かつこい……」

空

「え？なに？」

ひなた

「……なんでもない！」

空

「????」

ひなた

「むー……」

空

「なにふくれてんだよ？」

ひなた

「ふくれてない！」

空

「ふーん……」

ひなたがそっぽ向く。なんか機嫌を損ねたか？

空

「そっいゃ……」

ひなた

「え？」

空

「ひなたって最近やたらと遊びに来るね？」

ひなた

「そう……かな」

空

「なんか週末ごとに顔を合わせている気がするぞ」

ひなた

「えと……ほら、そらにいちちゃんには料理を教えてもらう約束だし」

空

「それにしたって……」

ひなた

「なに、それとも迷惑!？」

空

「いや、滅相もないです」

まあ確かにたいした迷惑にもなってないけど。むしろ自慢の料理の腕を披露できて嬉しいくらいだ。

ひなた

「せっかく来てあげてるんだから文句言わないでよ」

空

「はいはい」

まったくこのチビッコは……。耕介はどういう教育してんだ？

ひなた

「……でも……やっぱり迷惑……かな？」

空

「へ？」

ひなた

「あたし……邪魔かな？」

空

「そんなことはない……けど」

ひなた

「けど？」

空

「そんなこというのめずらしいな。どうしたんだ？」

ひなた

「・・・あたしだってそれくらいは心配するよ」

空

「ふーん、意外だ」

ひなた

「意外って・・・！」

空

「けどありがとな」

ひなた

「え・・・？」

空

「心配してくれて。でも大丈夫。イヤだったらとっくの昔に愛想つかしてるよ」

ひなた

「あ、うん。そっか・・・」

空

「そうそう。だいたいひなたがそんなこと心配する必要はないんだぜ」

ひなた

「そうなの？」

空

「だいたい子供のお守りは大人の役割なんだ。はっはっは！」

ひなた

「子供じゃないもん！」

空

「そういうのが子供の証なんだよ、ばーか」

ひなた

「うう……そらにいちゃんにはかって言われた」

空

「普段は言う側なのにな」

ひなた

「ばか！」

空

「無理して言うことはねーだろ！」

ひなた

「ふん、っだ！そらにいちゃんのひょーろくだまー！」

空

「どっから覚えてくるんだそんな言葉……」

空

「……」

ひなた

「……」

空

「……おい、ひなた。もうちょっと離れるよ」

ひなた

「……だって」

空

「いざというとき動けないだろ」

ひなた

「ど、どんなときよ……！」

空

「だからいきなりなにか飛び出してきたときとか……」

ガタッ

ひなた

「きゃっ!!」

空

「ぐえっ!？」

ひなた

「あ……!？」、「ごめん、そらにいちゃん」

空

「……頼むから内蔵を圧迫するのは止めてくれ」

うう……腹部を思いつきり締め付けやがって。

っーかここに入ったのは間違いだったか……。

つい数分前……

空

「じゃあ次はお化け屋敷ー」

ひなた

「え……つと……それはまた!」

空

「ほう、怖いのか？」

ひなた

「こ、怖くなんかないもん!平気だもん!」

空

「じゃあ大丈夫だね。これは身長制限ないしー」

ひなた

「あう……でもでも……」

空

「まあひなたがそんなに怖がりなら仕方ないかな」

ひなた

「怖くないもん!!!ほら行くよ!」

空

「けっけっけ!馬鹿なやつ」

と、ちよつと意地悪してこのお化け屋敷『戦慄!絶叫!魑魅魍魎の館 轟け!サイコハウス!』に入ったわけだが・・・
ひなたの怖がりや予想を遥かに超えていた。
事あるごとにいきなり飛びついては思い切り締め上げるのでお化けより質が悪い。

空

「はあ・・・物理的に心臓が悪い・・・」

ひなた

「うううう・・・」

相変わらずひなたは背後で丸くなっている。
仕方ない。

空

「ほら、手だせ」

ひなた

「あっ」

空

「これで幾分かいいだろ」

ひなたの手はわずかに震えている。ほんとにビビッてるんだな。

ひなた

「・・・あう」

空

「とりあえず手え握っててやるから飛び掛るのは勘弁な」

ひなた

「う、うん・・・」

空

「ほら、もう少しだから行くぞ」

ひなた

「あ・・・」

と、ひなたを引っ張っていこうとしたとき・・・

ガタガタッ！！

空

「うおっ!?!」

ひなた

「きゃああああ!!!!」

空

「あ!おい!!」

仕掛けに驚いたひなたがいきなり走り出しやがった。咄嗟のことでこちらの反応が遅れた。せっかく手を繋いでたのにひなただけ走り去ってしまった。

「つかここは迷路みたいなお化け屋敷だ。見失ったらまずい・・・
ってもう遅いか。見失った。
どこに行った・・・?」

空

「ひなた！」

・・・返事がない。

空

「あーもう！あのチビッ！」どこまで手間かけさせるんだよ

ひなた

「あう・・・どうしよう」

驚いてついひとりで逃げ出してしまった。

しかもどこをどう走ってきたのかわからない。

ひなた

「うう・・・そらにいちゃん・・・どこ？」

怖くてあまり大声が出せない。ほとんど独り言のような感じだった。

ひなた

「・・・こわいよお・・・」

膝を抱えて物陰に隠れるように座り込む。

ダメだ。怖くて動けそうにない。こんなにも自分は怖がりだったのか・・・。

ひなた

「うう・・・」

怖いよお・・・やっぱり入らなければよかったかも・・・でも
そらにいちゃんとなら大丈夫だと思ったのに・・・でも自分から
離れちゃ世話ないかなあ。

ひなた

「そらにいちゃん・・・」

でも多分ここで我慢してくれればそらにいちゃんがきてくれるはず
だよな？

あのときも来てくれたもん。だからきつと・・・。

『おまえか・・・』

ひなた

「ひつ・・・!!」

な、なに!?

『お前が悪いんだ・・・』

ひなた

「・・・っ!!」

悪い・・・あたしが・・・?

『お前のせい・・・』

ひなた

「ひっ!?!」

違っ……悪いのはあたしじゃない……!

ひなた

「ひぁ……っく……!?!」

違っ違っ違っ……!あたしは……!

ひなた

「っく!?!」

いてもたってもいらねずに走り出した。

ひなた

「違っ……!あたしは悪くない!?!」

そっだ、悪くない!悪くない悪くない悪くない!

ひなた

「はあっ……はあっ……悪くなんか……っ……ないもん!?!」

イヤだ!もうここはイヤだ!!誰か……!!

ひなた

「あうっ!?!?!」

バタッ

思いつきり転んでしまった・・・。

ひなた

「うう・・・ひつく・・・！」

ひなたの頬を涙が伝った。

ひなた

「私は悪くなんか・・・！！」

空

「そうだな、今回はお前を一人にした俺の責任だ」

ひなた

「え・・・？」

ゆつくりと顔を上げた。

暗くてよくは見えなかったけど、そこにいたのは・・・。

空

「や、お姫様。お迎えにあがりました」

ひなた

「そらにいちゃん・・・」

空

「ったく、こんなとこでなにやってんだよ、ひなた」

思ったよりも時間をかけずにひなたを見つけた。だけど・・・

なにかおかしい？

空

「ひなた、どうかしたか・・・？」

ひなた

「ひつ・・・！！！」

空

「・・・ん？」

なんでこんなに怯えてんだ？いくらお化け屋敷で一人になったから
つてこの怯えようは・・・。

ひなた

「あたしは悪くなんか・・・っ！！！」

空

「・・・ひなた・・・？」

ひなた

「そらにいちゃん・・・あたしは悪くない・・・！悪くないんだか
ら！！！」

空

「落ちてけひなた。誰もお前を責めたりなんかしていないから」

ひなた

「ひつく・・・あた・・・あたしは・・・！！！」

・・・軽い錯乱状態になっているな。いったいどうして・・・？

『お前が・・・』

ひなた

「っ!!?!? いやっ!!!」

空

「……ん?」

今は……館内の音響か。そういやさっきから聞こえている声
だけど……。

空

「このせいか?」

ゆっくりとあたりを見回すと、天井のほうにスピーカーらしきもの
が見えた。

空

「悪いな。修理費は気が向いたら払ってやるよ」

ブチッ、とスピーカーのコードを引きちぎった。これである声は聞
こえないだろう。あとは……。

空

「ひーなた?」

ひなた

「……っ!」

……完全に怯えてるな。

空

「ひなた、俺がわかる?」

ひなた

「・・・うん・・・」

よかった。とりあえずまわりは見えているみたいだ。

空

「もう誰も責めないから。とにかくここから出るぞ」

ひなた

「・・・うん」

空

「立てる？」

ひなた

「・・・うん。・・・あっ！」

空

「おっと」

だめだな。完全に腰が引けている。

空

「しゃーねえ」

ひなた

「あっ」

ひよい、とひなたを持ち上げた。

ひなた

「そ、そらにいちゃん！」

空

「出口まで連れてってやるよ。怖かったら目閉じてるよ」

ひなた

「・・・うん」

そのままひなたを抱えて出口まで歩いていった。五分ほどでようやく外の空気を吸えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5934h/>

@-アットマーク-

2010年10月28日08時08分発行